
World of Fantasy After

ピエロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

World of Fantasy After

【Nコード】

N4419U

【作者名】

ピエロ

【あらすじ】

記憶力0、意地汚い、面倒くさがり、ダメ人間の代名詞なのに何故か強い主人公的存在 桂峰 神紅は自分が異世界にいるということを忘れていた。それでもって食事をすることも忘れて森の中で倒れていたところをエルフの少女 ラクア・ローレンスに助けられ向かう方向が同じという理由でとりあえず一緒に旅する。そして主人公は異世界で何をするのか？ そんな異世界モノのファンタジーなストーリー。

プロローグ とある森の中で

「ハラ減ったなあ…ぼくもう死んじやいそう…」
ぼくは今倒れている、体に力が入らない。

（どうしてこんなことになったんだっけ？）

「……………」

（ダメだ、まったく思い出せない… 誰か人でも来ないかな？）

「……………」

（来ないだろうな、こんな森の中じゃ…どうしてこんな森にいるんだっけ？）

「……………」

（本当にダメだ、まったくもって思い出せないや、それになんだか眠くなってきたなあ…）

「……………」

（ああ…でも こんなところで寝たら魔獣に襲われちゃうな）

「……………」

（ん…ここはいつそ寝てみようかな？起きていても何もできないし、魔獣が来ても助からない）

(…うん、寝よう)

(ああ、でも、どうせなら気持ちよく眠れるといいな)

第一話 黒い行き倒れ

「ん……」

（もう朝……早いなあ……）

ぼんやりした意識のままベッドから起き上がりカーテンを開ける、
日差しが目を突き刺す。

「まぶしい……」

思わず声に出してしまっただけらしい。

（眠い……な、とりあえず顔でも洗って朝食をとろう……かな？）

（さて、次はどこに行こうかしら？）

完全に目が覚めたわたしは朝食のスープを飲みながら考える。

（ん……この辺で一番有名なのはオーエン城とその城下町かな、ああ……でも前の王が死んでからあまりいい噂は聞かないからなあ……、ここは危ないけど森を抜けてナルサ村に行く方がいいかな？）

（……うん、そうしよう　そうと決まれば早速準備しなくちゃ）

朝食を食べ終えて手短に荷物をまとめ、わたしは宿屋を後にする。
森には徒歩でも数十分ほどで着くが、その森は森といってもかなり広いらしく、迷うとなかなか出られないと少々厄介な森らしい。

（まあでも、道から外れなければ日没までには抜けられるらしいし
…大丈夫よね？）

――森を進むこと3時間――

どこを見ても木しかない森の中で妙なものを視界の端にとらえた。

「ん？何かしら？」

近寄ってみるとボロ布のようなものが落ちている。

「……………」

よく見るとボロ布の間から足が出ている。

「人！！」

（生きてるのかな？）

わたしは近くにあった木の棒で突っついてみる。

・・・モソモソ・・・

（よかった、死んではいないみたいね）

今度は起こしてみようとビシバシと叩いてみる。

「起きない……………」

今度はもつと強く叩いてみる。

「・・・・・・・・ガウ!!」

「きゃっ!!」

いきなり棒に噛み付いてきた。

わたしは思わず尻餅をついてしまう。

「あれえ？ここはどこ？」

キョロキョロと辺りを見回し、とぼけた声で言う謎の行き倒れの
人。

（・・・・・・・・何なのよ、この人・・・・・・・・）

第二話 遠い国から？

わたしはまだ辺りを見回してる黒服の男の人に声をかける。

「あなた何者なの？ こんなところで何してたの？」

わたしが声をかけると、彼は初めてわたしに気づいたかのようにこちらを向く。そして口をポカン 開けたまま静止する。

「・・・・・・・・」

――2分が経過――

わたしはもう一度声をかける、すると・・・

「・・・忘れちゃった、ぼくって何者なんだろう？」

信じられないことを言った。

「・・・・・・・・」

（この人…何を言ってるの？ 自分のことを忘れるなんて…）

わたしは言葉が出ない。

「じゃ、じゃああなた名前は？」

別の質問を試みる。

「・・・忘れちゃった」

彼はサラリと言った。

（・・・信じられないわ、普通自分の名前を忘れるかしら？）

「じゃあ、何か自分のことがわかるものはないの？」

諦めず聞いてみる。すると彼は皮の袋を取り出し、中身をばら撒く。

どこから出したかは謎だけど・・・

しかし、その中身はノート一冊にペンが一本、銅貨三枚に石ころがひとつと透明できれいな丸い玉が少数と、大したものが入っていないかった。

わたしはそこからノートを手にとってみる。するとそこには決してうまいとはいえないような字で、『桂峰 神紅』と書いてあった。

「あなたの名前ってコレ？」

ノートに書いてある名前を指差して、わたしは聞いてみる。すると彼は思い出したかのように手をポンと叩いて言った。

「そうだったそうだった、これがぼくの名前だ、ぼくは桂峰神紅っていうんだ なかなかカッコいいだろ？」

自慢げに彼は言ってくる。

「カッコいいのは別として不思議な名前ね、どこの国の人なの？」

わたしが聞いてみると、彼は遠くを見ているかのように上を向いて

「フツ... 風にでも聞いてくれ」

なんて似合わないことを言う。

しかも丁度よく風が吹く…

(・・・こんなカツコつけたこと言ってるけど、きつと忘れたんだろうなあ)

「ところで君は誰？見たところ旅の途中かな？」

「え？ ああごめんなさい、わたしはラクア、ラクア・ローレンスっていうの、一応よろしくね。それにしてもよく旅してるってわかったわね？」

「ん？そりゃあゝいかにも冒険者ですって格好してるもん」

当然といわんばかりに言った。

「そうかな？動きやすさを重視した服なんだけどなあ…？ でもあなたの服も変わってるわよね、何 っていうの？」

「コレかい？これはね羽織と袴って、いわゆる『さむらい・すたいる』って言うんだ」

・・・聞いたことのない名前の服ばかりに少し戸惑ってしまふ。

「へえゝあなたのいた国って珍しいものが沢山あるのね」

「さあ？忘れちゃった」

とぼけたことを言うカツラミネさん、頭が痛くなってくる発言だ。

「それよりカツラミネさんゝよね？こんなところで何してたの？」

「・・・寝てた」

「どうして？」

「んゝ…そういえば何で寝てたんだろう？」

そういつてカツラミネさんは考え込む。そしてその時――

――ぐううううう…――

カツラミネさんが盛大にお腹を鳴らした。

「もしかして、お腹をすかして倒れたとか？」

「・・・どうやらそうみたいだ」

本当に頭が痛い・・・

「じゃあとりあえず何か食べる？」

わたしがそう言つとカツラミネさんはガバツと身を起こして言った。

「いいの？」

「少しだけよ」

そう言つてわたしは荷物から大きめの干し肉を取り出す。

「これでいいかしら？」

カツラミネさんはよだれを垂らしながらガクガクとうなずく。
わたしが干し肉を渡すとガフガフと食べ始めた。

「カツラミネさんはどこに行く途中なの？」

干し肉にかぶりついているカツラミネさんにわたしは聞く。

「ん？多分そうだよ」

口の中の肉を飲み込んでから言う。

「ふゝんどどこに行くの？」

「あっちかな？」

カツラミネさんがわたしの行き先と同じ方向を指差す。

「あら、それじゃわたしと同じ方向ね、どうせなら一緒に行かない？」

「ん？いいよ」

そう言うって最後の一かけらを飲み込む。

「それじゃあゝあらためて、わたしはラクア・ローレンス、よろしくね」

「ぼくは桂峰 神紅、よろしく」

(ふふっ 少しの間かもしれないけど楽しい旅になりそうね)

第二話 遠い国から？（後書き）

どうだったでしょうか？

ご意見、感想などありましたら ぜひー！コメントください。

第三話 夜の一時

その後、多少魔獣と遭遇したもののどうにか日没前にナルサ村に着いた。が・・・

「カツラミネさん！どうして戦ってくれないのよ!？」

（遭遇した魔獣と戦ったのはわたしだけよ!）

「だって、面倒だし疲れるじゃん？」

「...わたしが疲れるのはいいってこと・・・それ？」

「だって君って剣の扱いがうまいだろ？」

「!?!」

（え？どうしてわかったのかしら・・・？）

「ん？どうしたの？早く宿でも見つけて休もうよ、疲れてるんだろ？」

「ちょっと待って!どうしてわかったの？」

「え？何が？」

「いや・・・その、わたしが剣を使えることよ・・・」

するとカツラミネさんは「ああ、そんなことが...」とつぶやいて言った。

「まずあれ？って思ったのは手かな？女の子の手にしてはマメは多かったからさ、あとは単純に太刀筋 が上手かったからそうじゃないかな？って思ったただだよ」

「・・・・・・・・」

（すごい観察眼だわ・・・とてもさつきまでボケてた人には見えな
いわ）

「さあ話はここまで、宿を見つけて休もうよ、もうお腹が減って倒れそうだよ」

「・・・そうね、早く見つけましょ」

（…カツラミネさんって何者なのかしら？）

・・・・それから約5分――

ようやく宿を見つけた。

「2名で1泊お願いね、あとご飯もつけてちょうだい」

わたしは注文する、わたしの横ではカツラミネさんがグデ〜と座り込んでいる。

「かしこまりました、いつ食事にします？」

宿の御上がそう言うと、カツラミネさんはサッと起き上がって言う。

「今すぐ用意してください!!」

「かしこまりました、それでは部屋へご案内します」

そう言つて歩き出す御上をわたしたちは追いかける。

案内されたのは割と大きな部屋だった。しかし・・・

「何で一緒の部屋なの!？」

「さあ?どうでもいいじゃんそんなの、それよりご飯はまだかなあ?」

そう言つてツウーとよだれを垂らすカツラミネさん。

「どうしてもよくないわよ!」

「しょーがないじゃん、一部屋しか空いてないって言っただから」

「・・・それはそうだけど」

(やっぱり恥ずかしい、会ったばかりの人といきなり相部屋なんて・・・)

そんなことを考えていると「お待たせしました」と言つて御上が夕食を持ってきて言った。

「ご飯だ!!!」

はしゃぎ出すカツラミネさん。

そんな彼を見ていると、恥ずかしいと思つていた自分がバカらしくなってくる。

「ねえねえ、早く食べようよ。」

「……………そうね、食べましょ。わたしもお腹が減ったわ。」

わたしがそう言っているとカツラミネさんが「いただきます」と言つてガフガフと音を立てながら食べ始める。わたしもそれにならう。

「そうそうカツラミネさん、いくつか質問していいかしら？」

スープをすすっているカツラミネさんにわたしは聞く。

「いいよ、何かな？」

ぷはぁとスープを飲み終えてカツラミネさんが言う。

「カツラミネさんって戦いとかできます？」

「さあ？どうなんだろう？」

「……………じゃあカツラミネさんってどこに行く途中だったの？」

「ハッキリした場所は忘れちゃった……」

「……………何歳なの？」

「ん……一番新しい記憶では17歳かな？」

「ええっ!？」

「え？何？どうしたの？」

（信じられない…わたしより1歳年上なだけじゃない！）

「人って見かけによらないわね・・・」

「そうかな？」

「ええ・・・」

驚きのあまり言葉が出ない。

「そつえばラクダさん、君はどこに行くつもりなんだい？」

いきなり話をふってくる。

「ちょっと待って、ラクダさんって誰のこと？」

「ん？君の名前だろ？」

「ちがいます！わたしの名前はラクアです！ラクア・ローレンスっていの」

「ふうんまあいいや、で？どこ行く途中なの？」

「・・・エルフとか亜人のいる国よ」

「へ？人間以外にも人っているの？」

「え？そりゃもちろんいるわよ」

「君は……人間なの？」

「わたしは……エルフよ」

「へえ」

感心したように言う。

「どうしたのよ？」

「いやあ〜エルフってみんなラクアさんみたいにキレイなのかな
って」

「えっ？わたしが…キレイって／＼／」

「ん？何？どうしたの？」

「別に……どうもしてないわよ／＼／」

突然の言葉に戸惑ってしまう。

「じゃあエルフがいるなら他にもそういう人たちがいるの？」

自分のご飯を食べ終えたカツラミネさんはわたしのご飯にそと
手を伸ばしながら言う。

「…ええ、他にも竜人族とか獣人族、ドワーフに人魚とかかしら」
なぜかそれに気づかないわたし。

「たくさんいるんだね」

「まあね、でも人間以外の種族を嫌う人たちは沢山いて、迫害したり奴隷として売ったり、中には理由もなく殺す人もいるわ」

「・・・・・・・・」

「だからそういったことのない国を亜人たちがつくったのよ」

「・・・・・・・・」

「理解してる？」

「もちろん！」

胸を張って言うカツラミネさん。

（自信ありげに言うけどきつと理解してないだろうな）

「まあいいわ、そろそろ……って、ちょっと！わたしのご飯がないじゃない！」

「あれ？どこにいったんだろう？」

「あなたが食べたんでしょ！？」

「失敬な！ぼくじゃない」

「・・・・・・・・・・はあ……もういいわ、今日はもう寝ましょ」

「そうだね、ぼくももう眠い」

そう言ってカツラミネさんはモソモソとベッドに入っていく。

「じゃあ明かり消すわよ」

返事がない、近ずいて見てみるとグワッと口を開けて寝ている。

(ふふっ おもしろい人)

「・・・おやすみなさい、カツラミネさん」

そうして明かりを消し、わたしもベットに入り眠りについた。

第三話 夜の一時（後書き）

意見、感想、などありましたらコメントください。

登場人物紹介

桂峰 かつらみね 神紅 しんく

身長・体重・歳・184cm・48キロ・??歳

・種族・人間

黒の和服にサングラスという奇怪なファッションの主人公的な存在。

忘れっぽくて意地汚く、そのくせ面倒くさがりで職業不詳の謎の多い男。

ラクア・ローレンス

身長・体重・歳・163cm・46キロ・16歳

・種族・ライトエルフ

炎髪灼眼の有名なあの方とは反対の水色の髪に蒼い眼の少女。

ハイド・ブライン

身長・体重・歳・176cm・62キロ・21歳

・種族・竜人

桂峰の奴隷1号。

歌って踊れて戦えて、たまに損な役割を担う竜人。

エリナ・アタランティア

身長・体重・歳・145cm・42キロ・15歳

・種族・ライトエルフ

桂峰の奴隷2号。

攻撃、回復、補助、といろいろな魔法が使える万能な少女。

ティネルローゼ・アルイーマ

身長・体重・歳・136cm・29キロ・12歳

・種族・獣人

桂峰の奴隷3号。

幼いながらも莫大な魔力を持っている少女。

石宗 豪

身長・体重・歳・170cm・55キロ・19歳

・種族・人間

エヴァン城の総大将を勤めている、ノリのいいやつ。

今は剣士だが前は暗殺・情報収集を得意としたチエイサーだった

桂峰の友人。

巡夜に好意をよせている。

雪咲 雅

身長・体重・歳・155cm・44キロ・18歳

・種族・人間

舞うように戦う舞姫という珍しい職業の桂峰の友人。

桂峰のことが気になっているとか・・・

伊志井 将

身長・体重・歳・171cm・52キロ・18歳

・種族・人間

かなり強いとか・・・なんとか

錬金術を使えるアルケミストで桂峰の親友。

巡夜 めぐりよ 星奈 せいな

身長・体重・歳・162cm・46キロ・19歳

・種族・人間

精霊使いという特殊な職業をしている桂峰の友人。

おっちょこちょいだが頼りになる人で、この人もまた・・・

第四話 朝の出来事

わたしはザワザワとした物音に目を覚ました。

（もう朝かあ）

「おはようカツラミネさん」

そう言っ てわたしは隣のベッドで寝ているカツラミネさんの方を見る。

「……………」

（まだ 寝てるみたいね…………）

わたしはカツラミネさんの体を揺する。

「起きてください カツラミネさん」

「……………んん〜」

モソモソと動き出す。

「……………んん〜どうしたの？」

のっそりと起き上がった言う。

「おはようカツラミネさん」

「……………おはよう」

「さっそくだけど出発の準備してね」

「・・・何で？」

「出発するから」

「・・・今何時？」

「そうね、6時30分頃かしら？」

「・・・まだ早い、寝る」

そう言ってまた眠り始める。

「ダメです！起きてください！」

わたしはカツラミネさんの足を引っ張ってベッドから引きずり落とす。

「グギャ！」と妙な声を上げて床に落ちる。

「大丈夫ですか？」

「・・・あまり大丈夫じゃないな、それに目も覚めたよ」

「そう、じゃあ準備して行きましょうか」

ニッコリと微笑んで言う。

「・・・」

「ん？どうかしました？」

「いや、何も・・・」

そう言つてカツラミネさんは準備を始める。

（何だつたのかしら？）

.....

「さて、どこに行こうかしら？」

「・・・ねえ、朝ごはんは？」

「ないわよ」

「どうして？」

「お金がないからよ　カツラミネさんお金持っていないから節約もしなきゃいけないの」

「・・・お腹減った」

「我慢してね」

わたしがそう言つと残念そうな顔をするカツラミネさん。

「しょーがないじゃない、ね？」

「・・・わかったよ」

「ありがとう　じゃ、行きましょ」

「どこに？」

「とりあえずエヴァンに向かいましょ　この大陸では一番大きなところだから」

「ふゝん了解」

「――こうして村を後にした――」

第四話 朝の出来事（後書き）

今回は少し短いです

すいませんm（――）m

第五話 昼の出来事

村を後にしてから約2時間

「ねえ、まだ着かないの？もう疲れたよぉ」

ダダをこねはじめるカツラミネさん。

「まだ2時間しか歩いてませんよ」

「何を言ってるんだい、2時間もだよ」

「・・・目的地まで2日はかかるわよ」

「なっ!!」

ガツクリと膝をつくカツラミネさん。

(うわぁ、面倒くさぁ)

「ほら、ちゃんと歩きましょう 歩かなきゃ着きませんよ」

「・・・・・・・・」

「おいていきますよ?」

「あつ いいこと思いついた」

「ん?何?」

「ふっふっふっこの疲れと空腹を癒しながら進む方法を思いついたのだよ！」

「へえ、何かしら？」

「おんぶして」

「却下!!」

「何ですよ？」

「当たり前でしょ！ 馬鹿なこと言っていないで行きますよ！」

「ちえ」

そう言ってしぶしぶと立ち上がるカツラミネさん。

（まったく、先が思いやられるわ・・・）

・・・それから約1時間――

「あっ見てくださいよカツラミネさん、あれって馬車じゃありません？」

「ええ？ ああ、そうだねえ、馬車みたいだね」

「でも何か様子が変わらない？」

「ふん 興味ないね」

「・・・カツラミネさんって友達少ないでしょ？」

「まさか〱100人は軽いね」

「・・・まあいいわ あっ！ほら！道をそれて森に入りましたよ」

「へえ〱で？ どうすんの？」

「追いかけてみましょうよ」

「ん〱しょうがないな、面倒くさいけど」

わたしたちは追いかけて森に入る。

（ナルサ村の近くって森が多いのよね）

馬車を通ったであろう道を歩いていくと・・・奥から叫び声が聞こえた。

「ちよっ！今に何！」

「叫び声だね」

「行きましょ！ 何かあったのよ！」

「はいはい。わかったよ〱」

「もう！早く行きましょ」

妙に気分ののらないカツラミネさんを、おいて行く勢いでわた

しは森の奥へ走る

第六話 他人を襲うなんて・・・

森の中を走っていくと人らしき影が見えてきた、その中にわたしは飛び込む。

「あなたたち！何をしている！」

飛び込んだ先は倒れた馬車に決してキレイとはいえない服装の人たちと立派な服装の人、それに盗賊らしき者たちに馬と首のない人の死体がある。

盗賊らしき者たちは突然の登場に少し驚いた様子だった。

「あなたたち、何をしている」

わたしはもう一度呼びかける。

「ああ？なんだあ嬢ちゃん なんのようだあ？」

リーダー格らしき男が言う。

「もう一度問う、何をしている」

すると男はニヤニヤと笑いながら答えた。

「見てのとおり人を殺したただけだが？ そいつはちよいとワケありでな」

「あなたたちは何者だ」

「ハハッ！それも知らずに飛び込んできたのか！」

男は腹を抱えながら笑う。

「俺たちは聞けば誰もが泣いてひれ伏す偉大な盗賊団！『毒牙』だ！！」

ババン！と効果音が出そうな勢いで言う。

「いよお！さすが兄貴！」

噓し立てる子分。

「……まあいいわ、この場は見逃してあげる 去りなさい」

「ハッ！何言つてんだ嬢ちゃん？そんなこと言える状況か？」

そう言つてゲラゲラと笑う盗賊たち。

（まあ1対6じゃ誰もがそう言うわよね・・・）

「コレが最後よ 去りなさい」

「強気な嬢ちゃんだな、気に入ったぜ おいお前ら！殺さずに捕らえろ！」

「ヘイ兄貴っ！了解っす！」

「忠告はしたわよ！カツラミネさん、いくわぁ・・・よ？」

後ろを見るがカツラミネさんがいない。

（ええ？何でいないのよ！）

「何よそ見してんだっよっ！」

そう言つて一人が剣を振り下ろしてくる。

「まったくもう！ カツラミネさんってば！」

わたしは腰に納めてある剣を抜き柄の部分で向かってきた男のみぞおちを殴る。

男が白目を向いて倒れる。

一人目に続いて二人目が槍で突いてくる、それを体を逸らしてかわし下から剣を振り上げる。

ザシュッ！

（手応えあり・・・）

「ぎゃああああああ！」

叫び声をあげながら男が倒れこむ。

見ると右腕が男と一緒に転がっている。

「この野郎！」

二人がやられて怒ったのか、四人がいつせいに斬りかかってくる。

(む・・・四人いつせいか　しょうがないな・・・)

剣を下段に構える　剣に魔力を溜め込む。

「あなたが悪いんだからね！」

剣を振り上げ、魔力を放つ。

光がその場をおおい　4人盗賊たちは地面に倒れ　気絶した。

第七話 A s u r p r i s e a t t a c k

「なっ 嬢ちゃん！魔法が使えるのか！？」

4人が倒れたことであからさまに驚いてるリーダー格の男。

「ええ、といつても魔力を適当に放っただけだけど」

「っマジかよ！しゃーねーな今回は許してやる！次はないからな！」

ビシィ！ と効果音が出そうなぐらいの勢いで指を指し、いそいそと部下を担ぎはじめる。

「あなた、このまま逃げられると思ってるの？」

「ふっ・・・嬢ちゃんこそ俺様を捕まえられると思っているのかい？」

「もちろん 逃がすつもりはないわ」

「ぶっははははははは！嬢ちゃんおもしれえな！俺様はご近所では『疾風のマルド』と言われるくらい 素早い奴だと言われているんだぜ」

（こいつの名前マルドって言うのか・・・どこかで聞いたような・・・）

「おしゃべりはここまでよ」

わたしは言い終えたのと同時に剣を下段に構えたまま姿勢を低くして突っ込む。

「おおお！？早えな！」

マルドはすでに部下を全員担いでいる。

（大人数担いでいる分動きは鈍るはず・・・でも少し大きめな体なだけなのにあの大人数担げるなんて

マルドも魔法が使えるってことかしら・・・）

（まあいいわ・・・）

わたしはブレーキをかけ、マルドの目の前に止まる。
マルドの右肩めがけて剣を振り上げる。

（捉えた・・・）

が・・・振り上げた剣は空を切り裂いただけだった・・・

（なっ!?!）

「ふっ嬢ちゃん おしかったな」

気がつくと40メートルほど先にある木の上に立って笑っている。

「あなた!どうやって!?!」

「まあまあそれは次の機会に、それまで覚えてろよなあ!」

そう言つてどこかに消えてしまった。

（・・・逃げたか）

わたしは周りに気を配りながら襲われていた人たちに歩み寄る。

「お怪我はありませんか?」

わたしは服の立派な人に尋ねる。

「あつ… ああ 助かった…一人殺られたが」

「ごめんなさい 助けるのが遅れてしまつて」

「いやっ！ そんな誤らないでください」

「…わかつたわ じゃあ何か手伝いましょうか？」

「じゃあ、馬車の中にみんなを入れてくれないかな？」

「わかつたわ」

わたしはキレイとはいえない服装の人たちを誘導し馬車の中に入るように言う。

（…この人たち、おそらく奴隷ね）

「ねえあなた奴隷商人よね？」

「え？ああそうだが」

「コレを気にやめてくれないかしら？こんなこと…」

「…」

「…もういいわ」

わたしはまた馬車への誘導はじめる。

「おねえちゃん危ない！」

いきなり知らない女の子の声が耳に届く。

「え？」

ドカツ・・・

頭の後ろに痛みを感じた。

それと同時に体に力が入らなくなり倒れてしまう。

「助けてくれたことは礼を言うぞ、だがこっちも商売だからなあ、売れる奴ならどんな奴でも売る、それが助けてくれた奴でもな！」

その言葉を最後に　わたしは意識を失った。

第八話 お助け参ろう！うまく決まればカッコいい台詞

目が覚めるとわたしは馬車の中だった。

「・・・あれ？・・・なんでこんなところに？」

（奴隷の人たちを馬車に誘導していたのは覚えているんだけど、そこから先が思い出せないわ）

そんなことを考えていると一人の少女が駆け寄って来た。

「お姉ちゃん 大丈夫？」

「え？まあ頭が少し痛むけど大丈夫よ ありがとう」

「そっかよかった」

そう言ってニッコリと笑う少女。

（・・・かわいい／＼／＼）

「お姉ちゃんどうしたの？」

「ええ！？いや・・・なんでもないわ」

「ふゝん そういえばお姉ちゃん名前は？」

「わたしラクア、ラクア・ローレンスよ あなたは？」

「わたしはティネルローゼ・アルイーマ、ティルって呼んでね」

「ええ、よろしくねティル それよりここはどこなの？」

「ここ・・・あいつの馬車の中だよ」

「あいつ・・・まさかあの奴隷商人の！？」

「うん・・・」

大変なことになってるわね、どうしたものかな・・・

奴隷の証の首輪もしっかりつけられているし、武器も盗られてる。

「・・・・・・・・」

「お姉ちゃん大丈夫？」

ティルが心配そうに尋ねてくる。

その動作がとても愛らしい。

（・・・かわいい／＼／）

「・・・大丈夫？」

「え・・・ああ大丈夫よ　ありがとう」

「うん・・・．．．．．ねえお姉ちゃん、これからどうなるのかな？」

「やっぱり奴隷として売られるのは怖いよね・・・」

「うん・・・」

「大丈夫よ、わたしの友達がきつと助けってくれるわ」

「本当!?!」

「ええ　普段は頼りない人だけどきつと来てくれるわ」

「いつ来るの？」

「そうね〜そろそろ来てくれそうな気がするわ」

「本当!?!」

ティルとそんな会話をしていると馬車の動きが止まった。
すると外から話し声が聞こえる。

「おい！その人じゃまだからどいてくれ！」

奴隷商人の声

「いやあ〜どいてもいいけど、奴隷たちを解放してくれたらね」

どこか気の抜けた声

「っ！ふざけんな！こつちも商売なんだよ！」

「いや〜ね　ぼくの友達もいるみたいなんだよ」

「知ったことか！そんなこと」

「じゃあ力ずくでもいいかな？」

「っ！ふざけるな！おいそこの竜人、あいつを殺せ！」

「はあああ！？おいおいご主人！俺今まで馬車引いてきたんだぞ！？」

「黙れ奴隷の分際で！いいから殺せ！お前を殺すぞ！」

「・・・了解」

そう言っ**て**ぶつぶつ言いながら剣を手取る竜人。

「あれ？ぼくが用のあるのはあそこの商人さんなんだけどな」

「すまないな、奴隷の俺は逆らえないんだ 怨まないでくれ」

「ん？大丈夫だよ」

「ど**う**いう意味だ？」

「こ**う**いうこと」

そ**う**いうと男の姿が一瞬で消えた。

「な**っ**！？」

「は**っ**は**っ**は**っ**こ**っ**ちだよ」

男が奴隷商人の真後ろに立**っ**て剣を首につけている。

「な**っ**！？い**っ**た**い**ど**う**や**っ**て！？それ**に**俺の剣も！」

「ふ．．．風にでも聞**い**てくれ」

「．．．．．」

男の言葉に脱力する竜人。

「おい！竜人！何をしている！助ける！」

「もう遅いよ！商人さん」

「ひiiiiiiii！頼む！命だけは！」

「残念でした！もう助かりません！」

男が剣を振り上げる。

「いやだあああああああああああ！」

その言葉を最後に商人の首が宙を舞った。

第九話　夕方頃の出来事

突然馬車が止まったと思った。たら今度は奴隷商人の叫び声が聞こえた。

「え．．．今の何!？」

ティルが驚きと怯えを混ぜた声を上げてわたしに抱きついてくる。

「大丈夫よティル、わたしの友達が助けに来てくれたのよ」

「本当!？」

「ええ、さっきの悪い人をやつつけてくれたのよ」

「本当に本当!？」

「わたしは嘘をつかないわ」

わたしが言うのと嬉しさのあまりかぴよんぴよん跳ねながらはしやぎ出す。

わたしたちの話聞いていたのか、他の人たちの表情も明るくなっていた。

「ラクダさ〜ん あなたは完全に包囲されてま〜す、速やかに出てきてくれないかな？」

テイルと話しているとどこか気の抜けたマヌケな声が聞こえた。

「わたしの名前はラクアですよ！」

またも名前を間違えられたわたしは思いっきり叫びながら馬車を出る。

「あ、見い〜つけた」

「カツラミネさん わたしの名前はラクアですからね？ ラクダじやありません！」

「何だ〜元気そうだね 心配して損したよ」

「あれ？心配してくれたんですか？」

（ちよつと意外だな〜カツラミネさんが心配してくれるなんて・・・何か嬉しいわね）

「当たり前だよ ラクアさんが倒れでもしたら誰がご飯を作るのさ？」

（前言撤回！嬉しいなんて少しでも思ったわたしがバカだったわ！）

「どうしたの？そんな怖い顔して？」

「別に・・・何でもないわよ！」

「お姉えゝちゃゝん、どうしたのゝ？」

そんなやり取りをしているとティルが馬車から出てきた。
それに続いて他の人たちも出てくる。

「あ、ティルちゃん 紹介するね、わたしの友達のカツラミネさん」

「ぼくとラクアさんって友達だったの？」

「カツラミネさん この子はティルちゃん、仲良くしてね」

わたしはカツラミネさんの言葉を無視して続ける。

「そういえばカツラミネさん、この人たちどうするの？」

「ん？そのみなさんのこと？」

「そうよ、みんなお金だつて持ってないだろうし・・・」

「お金だったら奴隷商人のお金をみんなで分ければいいじゃん」

「でも服装とか・・・この格好なのよ？」

奴隷だった人の服装はみんな薄い布でできたもので、夜になったら流石に寒い。

「じゃあみんなを町まで連れて行けばいいのかな？　そうしたらあとは自分たちでもどうにかなるよ　ね？」

「まあお金にはあまり困らないだろうし、でもできるの？」

「その力持ちな竜人さんに頼めばね」

その一言でいっせいに竜人へ視線が注がれる。

「え？俺ツスか？」

「頼めるかしら？ええ」と・・・」

「ハイドだ、ハイド・ブライン」

「ハイドさんね、どう？頼めるかしら？」

「いやあそりゃ無理だ」

「え．．．でもカツラミネさんは．．．」

「無理なものは無理だ、あきらめな」

カツラミネさんはできると言ったが本人が無理みたいじゃ無理なのね．．．

「どうするの？カツラミネさん、無理だって」

「ハイド君、頼めるかな？」

「もちろんだぜ旦那！」

（はあ．．．？）

「できるってさ、よかったね、ラクアさん」

「いやいや、ちょっと待って！ この扱いの差は何？」

「ふっ．．．竜人は強いものに仕えるのだよ」

「．．．．．」

「よし！じゃあ早速準備しようか、ラクアさんに、ティルちゃんだっけ？ 手伝ってくれる？」

「もちろんよ」

「お手伝いさせていただきます！」

（あれ？ティルちゃんやけに気合入ってない？）

よく見ると目を輝かせてるし、何か頬が少し赤い。
いったいどうしたのかしら・・・？

第十話 出会い

全員の準備が整いあとは出発するだけになった。

（もう日が沈みかけているわね、出来るなら日が沈む前に町に着きたいわ）

「みんな準備できたわね？」

「「おお~~~~~!!」」

(みんな元気いいわね・・・)

「それじゃハイドさん、お願いね」

「ふんっ 言われるまでもない、下がってる」

そうやって全員と距離をとり体に力を込めはじめた。

「うおおおおお」

パキツ・・メキツ・・

ハイドの皮膚が乾いた音を立てて体の変形し始める。

「おおおおおおああああ!!」

バキバキバキッ!

「はあああああ・・・」

最後にもものすごい音を立てて体の変形を終える。

――竜化――

竜人族が使う変身能力であり、見た目は竜そのものに変身する。竜化を使うと筋力、耐久力、敏捷力、視力、聴覚、すべて感覚などが大幅にアップし、翼も生え飛行も可能になる。

「お・・・大きいですね・・・」

テイルが驚きの声を上げる。

確かに、竜化したハイドは体長が5メートルは超えている。

四肢は所々鱗がついて、太く長くなり、とても丈夫そうに見える。背中からは大きな翼が生えている。

胴体と顔はあまり変わっていないく、竜化というよりは半竜化とい

ったほうが近い形態になってる。

「おい！時間の限りが一応ある、早く馬車の中に入れ 馬車ごと持ち上げて運ぶ」

「わかったわ、じゃハイドさん よろしくね」

「ああ・・・」

そう言っただけでも馬車の中に入る。
カツラミネさんも馬車に乗り込んですでに寝てる。

(・・・まったく・・・のきな人ね)

カツラミネさんは口をがばーと空けてよだれを垂らしながら眠っている。

(今回はカツラミネさんに助けられたわね・・・まったく、不思議な人だわ)

「お姉ちゃん、あーそーぼー」

元気な声でテイルが話しかけてくる。

「いいわよ、あつカツラミネさんも起こしましょ〜か」

「ふえ！？だっ・・・大丈夫です！起こさなくていいです！」

「え？何で？多いほうが楽しいわよ？」

「起こしちゃ悪いですから・・・もう／＼」

「ふ〜ん、まあそこまで言うなら あっ！そのエルフの子！一緒に遊ばない？」

「・・・え？ 私・・・ですか？」

いきなり声をかけられたからだろうか、少し驚きの声を上げて言葉返してくる。

「そうそう！ いやあ〜こんなところで同族に会えるなんて思ってもなかったわ」

「え？・・・あなたも・・・ライトエルフなの？」

「うん、わたしはラクア、ラクア・ローレンスっていうの よろしくね」

「あ・・・えつと私はエリナ、エリナ・アタランティアです」

「私はティネルローゼ・アルイーマっていうの、ティルって呼んでね」

「うん、よろしくねティル」

新しく友達も出来て、それから楽しく遊びながら過ごした。カツラミネさんは相変わらずで、ずっと眠り続けている。

（やっぱり平和が一番よね）

第十一話 再開？

出発してから約2時間、太陽は沈みあたりは暗くなってきた。

「そろそろ着くぞお！」

ハイドさんが大きな声で伝えてくる。

「わかったわ〜！ よしみんな、降りる準備して」

「はい」

各自準備に取り掛かる。

「あ、ティルちゃん カツラミネさん起こして」

「ふえ？わ・・・私ですか！？」

顔を赤くして驚いたように聞き返してくる。

（ん〜どうしたのかしら？・・・まあいいか〜）

「じゃ、よろしくね」

「え！？あつ！あつ・・・」

口をパクパクさせながらおどおどしてるティルちゃん。

（かわいい／＼／＼）

と、そこまで考えたところで思考を切り替え準備に掛かる。

――それから数分後――

ドンツと馬車が揺れ 無事に到着した。

「おおーい着いたぞ！」

「よし、みんな降りて」

みんなを誘導してとりあえず馬車から降ろす。

「ああ・・・腕痛えーもう腕がパンパンだよ、お前たち重すぎ！
痩せるという事を知らないのか！」

ハイドさんが文句を言い始める。

が、ハイドさんの発言で女性全員がハイドさんに殺意のこもった目を向ける。

もちろんわたしも・・・

「ハイドさん、誰が『重い』ですって？」

「ああ？何だラクア？どうかしたか？」

「奴隷でまともな食事もらえない・・・それに加えて女性に『重い』って言うのは失礼じゃなくて？」

「あつ・・・」

ようやく自分が爆弾発言したことに気がついたのか、だらだらと汗を流し始め男性の方へ助けの目をむける。

わたしに続いて女性全員がハイドさんに詰め寄る。

「いやあゝアレだ！言葉のアヤだ！なっ？」

必死の弁解。

「言い訳はそれだけですか？」

笑顔で切り捨てる。

それからまもなくハイドさんの叫びが響いた。
男性は皆下を向き「ハイド隊長お〜」やら「隊長の勇姿は忘れな
いっす!」やら「隊長!漢ツス!」

などなど涙を流しながらつぶやいてる。

そんな時・・・

「おい、お前たち!そんなところで何をしている!」

一人の男が大声を上げ、尋ねてくる。
格好を見るとどうやら兵士らしい。

「あ・・・えつと・・・私たち旅の者です」

エリナちゃんが答える。

「旅の者?そんな大人数でか?」

怪しげな目を向ける兵士の男。

「はい、私たちは奴隷ですので用件の方はどうかご主人様に」

「んゝ・・・では少し待っててくれないか？上官を呼んでくる」

「分かりました」

そう言って兵士は走って行ってしまう。

「エリナちゃん、ありがとう 助かったわ」

「いえ・・・どうもです」

ペコリと頭を下げて言う。

――それから数分後――

他の兵士に比べるとはるかに立派な鎧を身に着けた男と大勢の兵士が来た。

「お前たちが旅の者か？」

立派な鎧の男が言う。

「はい」

礼儀正しく答えるエリナちゃん。

「確か奴隷なのだったな、お前たちの言うご主人様に会わせてくれないか？」

「分かりました、少々お待ちください」

そう言って、馬車へ向かっていくエリナちゃん。

（そういえばティルちゃんとカツラミネさん、どうしたんだろう？）

そんなことを考えていること約3分。

目をこすり、あくびをしながらティルちゃんとカツラミネさんが馬車から出てくる。

（あゝティルちゃんも寝ちゃったのかゝ）

「カツラミネ様、こちらの方がお話があるそうです」

エリナちゃんが言う。

「んゝ話？あゝめんどくさいから帰ってもらってよ」

手をひらひらと振ってあくびをしながら馬車に戻ろうとするカツラミネさん。

「カ・・・カツラミネ様！待ってくださいよ」

カツラミネさんの足にしがみついて止めようとするエリナちゃん。
まるでダダをこねた子供のよう。
そんなやり取りをしていると・・・

「桂峰！？桂峰じゃないか！？」

立派な鎧の男が驚きの声を上げる。

「ん？誰？」

本当に分からない、といったように答えるカツラミネさん。
相手の方は知っているみたいだがカツラミネさんの方は覚えがないらしい。

「豪だよ！石宗 豪！」

第十二話 日本の朝は酢豚とビール

目が覚めるとそこはそれはそれは立派な部屋だった。

（あれ・・・？何でわたしこんなところに居るんだっけ・・・？）

思い出せない・・・

それから数分間思い出してみようと試みる。

「・・・・・・・・・・」

（あっ・・・）

「思い出した・・・」

「――時間を遡って昨日の夜――」

「俺だよ！俺！ 石宗だよ！」

「だからあゝ知らないって言ってるでしょ？しつこい人は嫌われるよ？」

先ほどの威厳の漂う態度はどこへ行つたのか？カツラミネさんが「知らない」の一点張りの答えに慌てるイシムネと名乗る男。そんなことはお構いなしにそっぽを向くカツラミネさん。

「あのゝ旦那？ その人知り合いじゃないんですか？」

ハイドさんが言う。

「君まで何を言ってるんだいハイド君、ぼくはこんな人知らないって先から言ってるだろ？」

「でも旦那・・・向こうは知ってるみたいですよ？」

「他人の空似だよ」

やれやれといった感じにいうカツラミネさん。

「・・・・・・・・」

その横ではなにやらイシムネさんという男が考え事をしてる。

そしてハッと顔を上げて言う。

「桂峰くお前腹減ってないか？それに宿とかどうするんだ？何ならこっちで用意するぞ？」

その言葉にピクツと反応を示す。

「ああくそういえば確かステーキが山のようにあったなあく」

更なる追い討ち。

カツラミネさんの口からよだれがツーンと垂れる。

「いやあく思い出した！そうだよイシムネ君じゃないか！早く言ってくればいいのになくまったく」

「くくくくくくくくくくくく」

その場に居たほとんどの人がカツラミネさんに白い目を向ける。
もちろんわたしも。

「さっ！何ボサつとしてるんだい 早く行こつじゃないか！」

鼻歌を歌いながら歩いていくカツラミネさん。

「ねえ、ティルちゃん、エリナちゃん、ああいう大人にはなっちゃダメよ……」

わたしの言葉に首をかしげる2人に思わずため息をついてしまう。

（こうなったら わたしが良いほうに導かないと！）

そう意気込んでわたしも後を追う。

わたしの胸に新たな決意が生まれた夜だった。

――――

と……そこまで思い出してベッドから起き上がり、着替えて部屋を出る。

すると同じようにエリナちゃんとティルちゃんが部屋から出てきた。

「あつ ラクアお姉ちゃん」

「ラクアさん おはようございます」

「2人とも おはよう」

「ラクアさん ご主人様はどこに居るか分かりますか？」

「ご主人様？ああカツラミネさんね、ごめんなさい 分からないわ」

「そうですか・・・」

「とっとうか、何でカツラミネさんがご主人様なの？」

「ご主人様はご主人様ですから、どうかしたんですか？」

「いえ なんでもないわ・・・」

3人で話していると今度はハイドさんが部屋から出てきた。

「ん？お前たち何してんだ？」

「あゝハイドさんだ おはよう」

「お？テイルか、よい朝だな どうだい？これからお兄さんと散歩
でもないか？」

「おはようございます ハイドさん」

「おはようハイドさん 朝っぱらから何言ってるの？」

「うるせえなあゝ邪魔するんじゃないやねえよまったく・・・ そうだら

クア、旦那はどこにいるかわかるか？」

「さあ？まだ寝てるんじゃないかしら？」

すると突然・・・

ゴーンーゴーンーゴーンーゴーンー・・・

大きな鐘の音が鳴り響いた。

「今のが目覚ましの時間みたいね、この音だしカツラミネさんも起きてくるんじゃないかしら？」

「・・・いや、旦那だし微妙なところだな」

それから何分たっただろうか・・・

ハイドさんの予想通りカツラミネさんは一向に姿を現さない。
変わりに別の男が姿を現した。

確かイシムネ・ゴウという男だ。

「やあみんな！おはよう！いい朝だね！」

なぜか無駄にテンションが高い気がする・・・

「ええ・・・とイシムネさんですよ？　おはようございます、どうかしましたか？」

そんなイシムネさんに礼儀良く対応するエリナちゃん。

（さ・・・さすがだわ・・・わたしには真似できないわよ　あんな対応・・・）

「おおー確か桂峰の連れのヤツだよな？ご丁寧にも　そうだが、桂峰はどこにいるか知ってるか？」

「ご主人様ですか・・・おそらくまだ眠っていらっしやると思いますが」

「マジかよー相変わらずだなあー」

「あのお・・・イシムネ様はご主人様のお知り合いの方なんですか？」

「ん？そりゃあもちろん　昔にいろいろあつてな」

「よかつたら話を聞かせてもらえませんか？」

「え？」

「いえ、わたしたち実はご主人様について何も知らないんです、ど
ういうお方なのかも」

「へえゝ意外だな、俺はてっきりいろいろ知ってると思ったんだが・
・」

本当に驚いたかのように言う。

確かに・・・

確かにわたしたちはカツラミネさんについて何も知らない。
強さだって、きっとわたしやハイドさんより強いと思う。

（知りたい・・・）

カツラミネさんやイシムネさんの過去に何があったのか・・・
カツラミネさんがどういう人なのか・・・

「そうだなゝまあ本人も寝てるし、時間つぶしにな　話してやるよ
○　」

不適に笑ってイシムネさんが言う。
言葉の最後が妙にナマっている。

（んゝ何なんだろう？　こんな人たちがばっかなのかな？カツラミネさんの周りって）

第十三話 金持ちの朝は決闘？

町がにぎやかになりかけている時間。

イシムネさんに連れられ、食堂で朝ごはんではあるがまた微妙な時間で食事をとっている。

わたしやみんなが食べ終わる頃にエリナちゃんが口を開く。

「イシムネさんってこんな豪華な暮らしをしてるんですね」

感心したように言う。

「ああ、確かに、職業柄大事な役職だしそれなりに金ももらってるからね」

「そうなんですか？どんな職業をしていらっしゃるんですか？」

「この国のな、軍の総大将をやってる」

「総大将だっけ！？アンタそんな強かったのか！？」

イシムネさんの言葉を聴いてハイドさんが大声を上げる。
実際わたしも驚いた。

（人って案外見かけによらないのね・・・）

「フツ・・・まあね 少なくとも君よりは強いぜえ」

ハイドさんの驚きように調子にノツたのか、自慢げにそう告げる。

「ちょっとまってや！俺がアンタより弱いだと？聞きづてならねえなあ」

「お？何だ？ 俺とやるのかい？」

「言ってくれるじゃねえか いいぜ、やってやるよ」

何だかよく分からないけど一転しておかしな空気になってる。
やるゝとかやらないゝとか 男ってこんなのばかり・・・

――――

朝食を終え、城のすぐ隣にある軍備施設にある広場にわたしたちは移動する。

「へっ 謝るなら今のうちだぜ？ 総大将さんよ」

「言っとけ、勝つのは俺だかな」

挑発のし合いでより険悪な空気になってきてる。

2人とも額に青筋を立てながら「へっ へっ へっ」だの「あははははは」だの笑いあってる。

目が笑ってないけど・・・

「まったく・・・どうしたらこうなるのかしら？」

「いいじゃないですか、2人とも楽しそうだよ？」

わたしの疑問に笑顔で答えるティルちゃん。

（楽しそう・・・ねえ）

「確かに、ご主人様とイシムネさんの昔の話をしてくれるってのからは大分離れてますよね」

さすがエリナちゃん、わたしの言いたいことを分かってくれていたらしい。

「まあいいけど、それよりハイドさんとイシムネさんどっちが勝つと思う?」

「私はハイドさんだと思います、ハイドさんはああ見えて結構お強いんですよ」

「へえゝ意外ね」

「テイルはねえゝ引き分けだと思うなあ」

「あら、どうして?」

「んゝなんとなく?」

小首をかしげながら答える。

(んゝ相変わらずテイルちゃんはかわいいわねゝちっちゃいし)

「あつそろそろ始まるみたいですよ」

テイルちゃんのかawaiiさに癒されているとエリナちゃんが始まりを教えてくれる。

「いくぜええええ!!」

「うおおおおー!!」

朝っぱらから盛大に叫び、ご近所迷惑もはなはだしいくらいに声が響く。

それが男の熱い？戦いの始まりだった。

第十四話 女性の一言に耳を傾けると時に我が身を滅ぼす

始まってからのくくらい経っただろうか？

最初は五分五分な感じの戦いだったが、今はハイドさんは呼吸に乱れが見える。

それに引き換えイシムネさんは若干余裕な表情。

「うらあああ！」

激しい掛け声とともにハイドさんが真っ直ぐな拳を放つ。

「うおお！？早ええ！」

その拳を体をそらしてかわすイシムネさん。

声には驚きが混じったように聞こえたが、表情は笑ったまま。

よけられたことを気にせずハイドさんは放った拳を素早く引き、

大きく身をひねりイシムネさんの顔面めがけて勢いよく肘を振るう。

が、大きくしゃがみこまれかわされる。

それと同時にイシムネさんが足払いをかけてくる。

「ちっ！」

ハイドさんが舌打ちをしながら後ろに飛び、かわしながら距離を開ける。

「いやあ〜ハイドだっけ？お前なかなかやるな」

「ふんっ！お前に褒められても嬉しくねえな」

「ははは、そりやそうだな　って、お・・・？」

イシムネさんが何かに気づいた様子でハイドさんの後ろを見る。
そこには兵士であろう格好をした人が沢山いる。

「イシムネさ〜ん、朝っぱらから何してんスカ〜？」

一人の男の兵士が声を上げる。

「見てのとおりの決闘だ！」

「はあ〜そりや大変っスね〜、まっ頑張ってくださいっス」

「おう！頑張るぜ！　おら他の奴も俺の勇姿をちゃんと見とけよ〜」

ニツと笑って見せてイシムネさんが言う。

「はあくい頑張ってくださいあくい」

そんなイシムネさんに一人の女性兵士が応援の言葉をかける。

イシムネさんの顔が緩み、手を振ろうととする。

その瞬間……

イシムネさんの顔が歪む。

「へぶうううう」

情けない声を上げイシムネさんが吹っ飛び　ズシャアアアと盛大に地面に体をこすり、そのまま動かなくなる。

「この俺を前にしてずいぶん余裕じゃねえか」

ハイドさんが鬼の形相で言う。

が、ハイドさんのすさまじい一撃きを顔面にモロにくらったイシムネさんから返事は来ない。

「わあくハイドさんが勝った」

ティルちゃんが啞然としてる兵士を無視してはしゃぎだす。
エリナちゃんもホッと胸をなでおろしてる様子。

「ハイドさん、さすがにやりすぎじゃない？」

「何を言うラクアよ、戦いにやりすぎもやらなさすぎもない！」

「それでも相手はこの国のお偉いさんなのよ？ 何かあったらどうするのよ？」

「その時は……ラクア、お前に任した！」

「任せません！」

（まったく……調子が悪くなるとすぐわたしとかに押し付ける
何だかんだでハイドさんもカツラミネさんに似てきてる……どうにかしないと……）

と、そんなわたしたちを横目にむこうの兵士たちが気絶したイシムネさんを数人で担いで去っていく。
するとその中の一人の男性兵士がこちらに走り寄ってくる。

「この度はおそらくうちの総大将殿が迷惑をかけたっス、どうか許してほしいっス」

そういつて深く頭を下げる。

「い・・・いえ、気にしないでください、何もそちらが全部悪いというわけではないですし」

「そう言ってもらえると助かるっス、何分あのような性格なので」

そんなことを話していると、向こうのほうで声がする、どうやらこの人を呼んでいるらしい。

それに気づいた彼は「どうやら呼んでるみたいなんでこれで失礼するっス」と言って行ってしまった。

「それじゃ、わたしたちも戻りましょ　そろそろカツラミネさんも起きてるでしょうし」

そういつてみんな城に戻る。

が・・・カツラミネさんはまだ起きていなかった・・・。

（いったいどのくらい寝たら気がすむのよ！）

わたしの心の叫びに答える者は、もちろんいなかった。

第十五話 死しても悔いのない人は果たしているのだろうか？

平穏・・・

それはいつまでも続くものだとその時までは思っていた。

昼になつてもなかなか起きてこないカツラミネさんをわたし、エリナちゃん、ティルちゃん、ハイドさんの4人でお越しに部屋に行った。

何度声をかけてもまったく返事がなく部屋を開けると予想外の光景。

血塗られた部屋、その中に横たわる剣に身体を貫かれた人。

見慣れた真つ黒な「和服」という着物を着込んだ細い身体。

漆黒の闇のようなサングラスをかけた見慣れた顔。

間違いなくわたしたちの知るカツラミネさんが血に塗れた身体で横たわっている。

「う・・・そ・・・」

「ご・・・主人・・・様？」

「おいおい・・・ウソだろ？旦那あ・・・」

「カツラミネ・・・様・・・」

それぞれが思い思いの言葉を発する。
もちろん皆 驚きが声に混ざってる。

それからイシムネさんが来るまで、この信じられない光景から目が離せなかった。

―― Side 朝見恭平 ―――

（やった・・・とうとうやったぞ！）

俺は走りながらあまりの嬉しさに思わず笑いがこぼれる。

「ククッ・・・ハハハハ・・・ハッハッハッハ！」

（ついにあの忌々しい桂峰を殺してやったぞ！）

「アハハハハハハッ！」

（森の中では記憶を忘れさせることしか出来なくて焦ったが、結果オーライだな）

（これで・・・これで・・・！）

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

一人の男の笑い声だけが、静かな森の中に響いた・・・。

第十五話 死しても悔いのない人は果たしているのだろうか？（後書き）

すいません・・・
今回は短いです。

第十六話　なあ・・・人は死んだらどこへ行く？

閉じていた目を開き身体を起こすとそこは予想外の光景。

きれいな川が流れる一面に広がった草木に覆われた緑の世界。
そんな中にヤケに目立つ建物・・・大きな城が築かれている。

「あれ？ぼくこんなところで寝てたわけ？」

人一人見当たらないこの場に空しく響くマヌケな声。

「とりあえずお城に戻ろうか、今日の朝ごはんは何かなあ？」

「ふあゝ」と欠伸を1つこぼしのそのそと起き上がり、長身の黒服男・・・桂峰神紅は歩き出した。

「――時は少し前エヴァン城内――」

探していたのだろうか・・・イシムネさんがわたしたち4人を見つけて駆け寄ってきた。

その足音に意識が現実に戻る。

「やあ君たち！そんなところで何してるんだい？」

「「・・・・・・・・・・」

相変わらずというのか・・・テンションの高いイシムネさんの問いに答えられる者はいない。
皆暗い顔をしている、もちろんわたしも。

「おいおいどうしたんだよ？そんな顔してるっていいことないぜ？」

「「・・・・・・・・・・」

さすがに様子がおかしいのに気づいたのか、口調が変わる。

「・・・・・・・・何かあったか？」

「・・・・・・・・その・・・カツラミネさんが・・・」

口を開くのはわたし。

そのまま部屋の中に顔をむける。

「おいおい桂峰がどうしたっ・・・・・・・・て・・・・・・・・」

わたしが顔を部屋にむけたことがどういうことが分かったのだらう……

何だ？といった感じの声をあげながら部屋の中を覗いたイシムネさんの声が、部屋の中の光景を目にした瞬間途切れる。

「……桂峰！」

一瞬ぼーっとしたイシムネさんがハツとし、素早くカツラミネさんに駆け寄る。

「桂峰！」

刺さっていた剣を抜き呼びかける　が　返事はない。
まるでただの屍のよう……

「おい！この中に治癒の魔法が使えるヤツはいるか！？いないならすぐに使えるヤツを呼んで来い！」

その言葉に残りの3人が意識を現実に戻したらしい。

「ええ……と、はい！私が使えます！」

エリナちゃんがすぐさまカツラミネさんに駆け寄り、治癒の魔法をかける。

「ヒール！」

淡い緑の光がやさしくカツラミネさんを包み込む。
カツラミネさんの身体から傷が徐々に消えていく。しかし意識は戻らない。

「ヒール！ヒール！ヒール！」

それでもあきらめずエリナちゃんが何度も魔法をかける。

「えぐっ・・・ひい・・・る、ひい・・・る、」

エリナちゃんが泣きながらあきらめずに魔法をかけ続ける。
淡い光は濃さを増しカツラミネさんの身体を包む、傷はもう跡形もなく消えている。

が やはりカツラミネさんの意識が戻った様子はない。

「ううつ・・・ひい・・・る」

「もう・・・もういいから・・・ね？エリナちゃん」

涙を流してるエリナちゃんにわたしは歩み寄り、声をかける。
イシムネさんも歯を食いしばり、うつむいている。

「カツラミネ様ああー！」

ティルちゃんが泣き出す。

ハイドさんも涙は流さないものの顔に手をあて、下を向いている。

「ご主人様あ・・・ご主人様あ・・・」

エリナちゃんがわたしに顔を押し当て、声をあげて泣き出す。
わたしはそんなエリナちゃんの頭をなでる。
するとわたしの頬に涙が流れる。

（ああ・・・カツラミネさん・・・）

（死んじやっただ・・・）

改めて、カツラミネさんが死んでしまったんだなと実感した。

（もう・・・話せないんだ・・・もう・・・一緒に旅も出来ないんだ・・・）

涙がぼろぼろと溢れ出す。

そんな時

カツラミネさんの身体が淡い蒼の光に包まれる。
ヒールではない光に。

「え・・・？」

信じられないことが起こった。
その蒼い光がカツラミネさん身体全体を包み込み、消失する。
するとそこにカツラミネさんの姿はなかった。

第十七話 「詐欺なんかにかかるワケねえよ！」とか思ってるやつに限ってかか

時は夕暮れ。

そろそろ食事をとつてもいい時間だが、とても食事をしようとは思えない。

今、大きな目の部屋でわたし、ハイドさん、エリナちゃん、ティルちゃん、それにイシムネさんが集まっている。

ティルちゃんは泣き疲れたのか、わたしの膝を枕にしてすやすやと眠っている。

長い沈黙・・・時間だけが過ぎていく・・・。

「なあ？あれはなんだったんだ？」

そんな深い沈黙を破ったのはハイドさんの言葉が、「あれ」の指すモノに答えるものはいない。

「そんなの俺だって知りたいね」

イシムネさんが吐き捨てるように言う。

「あれ」・・・カツラミネさんの遺体が突然光に包まれ消えたこと。

いったい誰が？何のために？

謎だらけだ・・・

「イシムネさん、ご主人様を襲ったと思われる人物について何か心当たりとかありませんか？」

「まだ確証はない　が・・・もしそうならば最悪だな・・・」

「どういふことですか？」

「すまんが詳しいことは話せない、俺としては君らを巻き込みたくないんだ」

「そうですか・・・」

話が途切れ、再び長い沈黙。

日はもう沈みかけ窓の外が目に見えて暗くなっている。

「俺たちだけで考えても仕方ないな・・・今から仲間に連絡を取ってみる、すまんが少し席をはずす」

そう切り出しイシムネさんが部屋から出て行く。

「そうですね・・・私も少し疲れました　今日はもう休ませていただきますね」

エリナちゃんが疲れきった声で言う。

その表情には目に見えて疲労の様子が見え、眼が若干虚ろだ。

「すまないが俺も休む、もう何が何やら・・・」

そういつてハイドさんが立ち上がりエリナちゃんと一緒に部屋を出て行く。

（そうね・・・今日はもう休みましょうか・・・）

わたしも眠っているティルちゃんを抱きかかえ部屋をでて自分の部屋に向かった。

――――

「やっと繋がりましたか・・・」

誰もいない明かりの少ない部屋で石宗豪の声が響く。
手に持っているのは手のひらサイズの結晶。

「どうしたのおゝ豪くん？いきなりの連絡にビックリしちゃったよ」

手に持っている結晶が光、声を発する。
石宗の声に答えたのは女性の声。

「星奈さん、落ち着いて聞いてほしいんだ」

「何々いゝ？どうかしたの？」

「桂峰が殺された・・・」

「えっ・・・？」

その後数秒間、無音の世界ができる。

「推測なんです、殺したのは『ヤツら』じゃないかと・・・」

「・・・・・・・・」

「星奈さん？」

「え！？あ・・・うん そうだね、『ヤツら』がね・・・わかった、すぐにそっちに向かうね！」

「お願いします、あと少し気になることがあるんですが・・・」

「どうしたの？」

「桂峰の遺体がいきなり消えたんです、星奈さん、どういうことかわかりますか？」

「ううゝんわかんない、精霊たちに聞いてみる？」

「話が早くて助かります、願います」

「わかった、じゃあ何かわかったらこっちから連絡するね」

「よろしく頼みます」

その言葉を最後に、結晶から光が消える。

それを眺めているとふと昔のことを思い出す。

（そいや言ってたな桂峰・・・「大事な家族がいるから死ねない」って・・・）

（かなり死亡フラグの立ってる台詞じゃねえかよ・・・恥ずかしいったらありやしねえ）

そんな事を思い出すと思わず笑いがこぼれる。

（「死ねない」んだよね？ 俺は戻ってくると信じてるぜ！桂峰！）

どうしてだろうか？

気づけば、思わず夕日に駆けていくようなシーンのありそうな熱
血友情モノでありそんな台詞を思えるくらい気が楽になっていた。
これが噂のお電話クオリティなのか？

第十八話 桂峰とMystery World ①（前書き）

今回は桂峰の話です

第十八話 桂峰とMystery World 1

歩くこと数分。

緑のあふれた世界には目立つ大きな城の城門の前にたどり着く。
が・・・門は大きく開けられそうにもない、だからといってこの
まま待っていても開く気配はない。

「ん？どうしたもんかなあ？」

小首をかしげながら思わずつぶやく。

悩んでいるうちに1分・・・2分・・・と刻々と時間が過ぎていく。

「ん？どうしよ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・おーぶんせさみ！・・・ハハあ？なんちゃって」

考えに考えたが、どうしたらいいか分からずとりあえず叫んでみた。

「はあゝこんなんで開くわけないかゝ」

自分の言葉にやらやれといった感じで横に首を振る。
が、意外なことが起こる・・・

ゴゴゴゴゴオオオoooooooooooo

大きな音を立て門が開いた。

「・・・モノは試しってこと?」

その問いに答える者はこの場にはいない。

「まあ何でもいいや、さあゝて戻って朝ごはんだ!」

鼻歌を歌いながら桂峰はスキップで城の中へ入っていく。
ちなみに鼻歌で歌っているのは「365歩のマーチ」・・・

おかしい・・・

何かがおかしい・・・

そう思ったのは城を歩くこと数十分、使用人の姿すら見当たらないからだ。

なのにホコリ1つ見当たらない廊下、廊下の窓から見えるキレイに手入れをされた中庭。

中庭にある噴水や、池にすら汚れが見当たらない。

そして何より食堂らしきものがまったく見当たらないのだ！

「ううゝお腹減ったあゝ」

壁に手をつき覚束ない足取りで食堂と思われる場所を探し、さ迷い歩く。

ぐううううー――

先ほどから30秒に1度のペースで腹がなっている。

「はあゝお腹減ったあああ・・・」

空腹に耐えながら歩いていると、大きな扉の前にたどり着く。

「も・・・もしかここが食堂か!?!」

大げさに腕を大きく広げ、何かにすがるような声をあげて言う。
この扉からは何やら特別なものを感じる。

そう思うと自然と元気が出てきた、残った力を振り絞り期待を胸に思いっきり扉を開ける。

が・・・待ち構えていたのは残酷な現実・・・。

部屋の中には大きな丸いテーブルとそれに沿って一定の間隔でイスが並べられているだけだった。

「も・・・もはやぼくはここまでか・・・」

ガックリと膝をつきそのままボタンと倒れる。

ブロードウエーでもなかなか見られない迫真の演技だ。

そのまま動かなくなる。

それからしばらく経ったとき物陰から「何か」がこちらに歩み寄ってきた。

「・・・・・・・・」

しばらく、倒れた桂峰を無言で観察し、つんつんとつつき始める。

「・・・・・・・・」

まったく反応がないことに「何か」は安心したのか、気を緩める。

と、その瞬間――
ガバっといきなり桂峰が起き上がり。

「きゃっ！」

「何か」が驚きの声をあげる。
そんなことはお構いなく素早く後ろに回りこみ「何か」の首をとりいつでも首を絞められるように脅しかけ、口を開く。

「まったく、ぼくが空腹で倒れるまで出てこないなんて酷いんじゃない？」

脅しかけてるワリにはゆるい声で話す。
そこまできて気づく、自分が首をとっているのが小さな女の子だと。

「じ……ごめんなさい……お願い……殺さないで……」

女の子は身体を震わせながら怯えた口調で言う。

「別に殺す気なんてないよ」

このくらいの女の子なら大丈夫だろう・・・

そう思い、つかんでいた手を離し1歩分くらいの距離を開け今まで脅しかけていた少女を見下ろす。

少女はガクガクと震え、頭を手で覆い、その場で小動物のごとくうずくまっている。

そんな様子を見てしまうと、何やら罪悪感を感じてしまう。

「んゝ突然手を上げたのは謝るよ、もう何もしないからさ 顔を上げてよ」

「・・・ほ・・・本当に？」

「もちろん、ぼくはウソはつかないことで有名だからね」

怯える少女に笑ってみせ、手を差し伸べる。

少女はその手をつかみ立ち上がる。

「君ゝ名前はなんていうの？」

「私は・・・ミレイ・マナハート・・・です・・・ここ・・・の女神の一人です・・・」

「女神？」

「はい・・・女神です・・・」

よく分からないが照れくさそうに「えへへ」と笑いながら少女はいう。

女神・・・ねえ？こんなちっちゃい子供が？

「あのさ、ここってどこ？女神様がいるんだし天国とかなんか？」

「多分あなたの言う天国・・・じゃないです・・・ここ・・・天界です」

天国じゃなくて天界か

何が違っただろ？といいますが、何でぼくこんなところにいるの？

「ねえねえ、何でぼくは天界にいるの？ついさっきまで寝てただけなのに」

「その辺は・・・私には分からない・・・です」

思った疑問をそのまま尋ねたが、この子は知らないらしい。

が、「私には」ってことはもしかして他にも誰がいるんじゃないのかな？

「あのさ、この～天界にはさ他にも誰がいるの？」

「あ・・・はい・・・私のお姉様やお兄様もいます」

思ったとおりー

「じゃあさ、その人たちに会わせてくれる？色々聞きたいこともあるし」

「えっと・・・はい・・・わかりました・・・」

「ありがとう、ぼくは桂峰く神紅だったかな？　よろしくね」

「よ・・・よろしく願いします」

ペコリと頭を下げて言うその少女のしぐさは、まあ何とも可愛らしかった。

第十九話 桂峰とMystery World 2

その大きな城の中をてくてくと歩くちびっ子女神についていくとその足が1つの部屋で止まる。

「ここは?」

「ここは・・・お姉様・・・の・・・部屋です」

そう言つてその小さな手で部屋の扉をコンコンつとノックする。少しすると「どうぞ」と中から声が聞こえ、それに反応しミレイが扉を開ける。

部屋の中はカーテンにより光がさえぎられ、やや暗い。

そんな部屋を見回すが見事に何も無い。

部屋の中はベッドに机・・・と必要最低限のものしかおいていない。

「お姉様〜!」

部屋に入るとミレイが歳相応な幼い走りでベッドに座っている女性に飛びつく。

先ほどまでの若干怯え気味だった様子はどこへいったのやら・・・飛びつかれた女性は慣れているのか、ミレイを抱きとめ、その頭をやさしくなでる。

頭をなでられてミレイはくすぐったそうに目を細め、笑みを浮かべる。

ベッドに座っている女性はそんな彼女はやさしく見つめている。そんな様子の彼女に桂峰は思わず口を開く。

「モリオンですか？」

「違います」

脊髄から生まれたかのようなアホな言葉はたったの一言で否定される。

すると桂峰に ああ〜つい言っちゃったよ〜 といわんばかりの表情が浮かぶ。

そしてそのままガツクリと膝から崩れ四つん這いになる、その背中には寒さしか感じられない。

「プツ・・・フフフ・・・」

座っていた女性から笑みがこぼれる。

つられてなのかミレイも笑い出す。

「笑ってしまつてごめんなさい、少しおかしかったもので」

目元に浮かんだ小粒の涙をぬぐい微笑みながら言う、閉められた

カーテンからかすかに差す光がその顔をいつそう美しくする。

「私はフィノラ・マナハートと申します、以後よろしく願います」

そういつてペコリと頭を下げる、フィノラの透き通ったキレイな銀色の髪が揺れる。

ちなみにミレイも銀色の髪。

「あなたの名前は桂峰神紅さんですね？」

「ええ、そうですけど どうして知ってるのですか？」

むくりと起き上がり、気取った口調でいう。

「私はここ、天界からいつもあなたたちを見ていたので」

「ほお、ぼくはいつも女神様に見守られていたなんて、とんだラッキーボーイですね」

「あの・・・その・・・普通の口調でいいんですよ？」

「そう？でもなかなかキマっていたでしょ？」

「え・・・ええ・・・とても」

目を泳がせながら言うフィノラ。
そんなことにまったく気づかずに胸を張る桂峰。
微妙な空気が流れる。

「そうだ、ぼくがここにいるってことはぼくは死んじやったのかな
？天国にも地獄にも行けずに」

「はい、確かに死んでしまいました」

「ふーん、そんな死んでしまったぼくに何のようなのかな？」

「話が早くて助かります、実は頼まれていたきたいことがあるの
です」

「内容は？」

「ある場所に行つてあるモノを取つてきてもらいたいのです」

「へえー女神様からの頼みごとか、名誉なことだね」

「では引き受けていただけるのですか！？」

フィノラが期待のこもった眼で、その透き通った声でいう。
が・・・

「やだ」

答えはNO。

「どうしてですか!?!」

期待から驚きと焦りの声に変わる。

「答えは簡単さ、まず1に信用できない。2つ目、見返りにあまり期待できない。3つ目、お腹減ったし疲れた。4つ目、めんどくさい。そして最後・・・」

人差し指を立て、少し間を空けて口を開く。

「君たちはぼくが空腹で倒れるまでほつといたのが許せない!」

ズギューーーーーー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!

的な効果音がお似合いな感じで人差し指をビシッとむける。

「・・・・・・・・」

はじめのはいいとしても、くだらない理由で断る桂峰に言葉がな
い。

その間にも「頭が痛い」や「お腹が痛い」だの「胸焼けがする」
だの「足つった」などなど・・・

適当な言い訳をしきりにつぶやいている。

「あの・・・そんな理由なのですか？」

「そんなとは何だ！ぼくがどんな思いをしたかも知らずに」

「あ・・・その、ごめんなさい」

「まったくだよ、ということでお腹減った、何か食べたい」

「わ・・・わかりました！すぐ用意します！」

そっぴい残して勢いよく部屋を出て行くフィノラとミレイ。
足音が遠のいていくなか「きゃっ！」と可愛いフィノラの声
がした、おそらく転んだのだろう。

最初に見たときと大分印象が違うなあと思う。

人間に使われる女神・・・残念極まりない光景だった。

第十九話 桂峰とMystery World 2（後書き）

感想やコメントなどありましたら、ぜひください。

第二十話 桂峰とMystery World 3

フィノラとミレイが部屋を出て行くこと数分、これは時間がかかるだろうと思うと段段と睡魔が襲ってきた。

「ふああゝ・・・ねむ・・・」

ポツリと言葉をこぼす。

そのまま睡魔に勝てずベッドに横たわり、の○太君にも負けず劣らずの速さで眠りについてしまう。

――――

眼を開けると見えたのは何の飾り気のない天井。

むくりと体を起こし欠伸を1つ、そのままボケゝとのんびりする。

この起きた後のふわふわした感じがなんとも心地よい。

あれからどのくらいたったのだろうか？ などと考えながらごろんと今度はベッドに寝転ぶ。

布団や枕からほんのりと甘い香りがする。

「ご飯まだかなあ・・・」

ぐううううーとお腹がなり空腹を訴えてくる。
すると遠くからパタパタと足音が聞こえてきた、その音は段段と
大きくなってくる。

「桂峰さん 食事の用意がととのいました」

ガチャリと扉を開けフィノラが言う。

「本当？今すぐ行くよ」

起き上がり、寝返りなどでやや乱れた服を整えながら言う。

「な・・・ななな・・・何をしてたんですか！？」

服を整えているとフィノラが何やら取り乱したような声を上げる。

「何って、眠くなつたから寝てたんだ」

「寝たって・・・わっ・・・私のベッドですか！？」

「うん、そつだよ 中中いいベッドだね、匂いもいいしぐっすり寝
れたよ」

そういつて伍星の評価をベッドに与える。

が、フィノラを見ると煙でも上がりそうなくらい顔を真っ赤にし、若干涙目でこちらを睨んでいる。

その肩はふるふると震えている。

「どうかしたの？」

「なっ・・・何考えているんですか！？じよ、女性の寝所にそそそそんな、みみみ淫らに入るなんて不潔です！不謹慎です！え・・・えっちです！」

「何でそうなるのさ・・・」

「とっ・・・とにかく！今すぐ出てってください！」

そういつてポカポカと叩いてくる、地味に痛い。

「わっ、わかったからやめてくれないかな？」

そんな言葉には返事もくれず、そのまま部屋を追い出された。

フィノラはというと追い出した後、思い切り扉を閉め、鍵をかけている。

その息遣いはやや荒い。

「まったく、何をそんなに慌ててるんだい？あつ、もしかしてご飯が冷めちゃうから急いでるの？」

「！！」

「それなら別に叩かなくなつて急いでいたよ、ぼくは結構熱めのご飯が好きなんだ」

「か・・・かつ・・・」

「ん？どうしたの？」

「桂峰さんのばかぁーーーーー！！」

そういつて「うわぁーん」と涙を流し、声をあげながら走り去ってしまう。

途中でツルンつと足を滑らせ、べたああああん！と転んだのが見えた。

初めて会ったときの落ち着いた雰囲気はもはや感じられず、よく転ぶなぁーなどと思いながらその後を追いかけるのであった。

第二十話 桂峰とMystery World 3 (後書き)

感想などありましたらぜひください。

次回は出来るだけちゃんとストーリーを進めたいと思ってます。

第二十一話 桂峰とMystery World 4

食堂にたどり着くとスープにパン、サラダに炒め物など・・・
数々の料理が用意されていた。

料理の載った丸テーブルにそって置いてあるイスに座り、「いただきます」と手を合わせナイフとフォークを手に取り料理を口に運んでいく。

むかしの席に座ったフィノラがじいじと見ている、そんな彼女をチラッと見ると頬を若干赤らめながらぷいっとそっぽを向かれる。

「ふおふえふいひふえふお、ふいんふえんふおふえふあふいふおふあふえふふおふおふあふおふあひふあんふあふえ」

「あの・・・口の中のものを飲み込んでから話してくれませんか？」

口いっぱい料理を詰め込みながら話す桂峰に白い眼を向けていうフィノラ。

何やら態度がさつきより冷たいなあなどと思いながら飲み込んでいく。

ちなみにミレイはおいしそうにスープを飲み、満足げな表情で食事を楽しんでいる。

「それにしても、人間も女神も食べるものは同じなんだね」

ゴツキユンと飲み込み、口を開く。

「ええ、人間も女神もそのあたりは大して差はないですね」

「ふうん、ねえねえ2人とも歳はいくつなの？」

「女性にそのようなことを聞くんですか？」

「私？私はねえ〜もうすぐ8歳だよ」

フィノラがあまり気乗りしない口調で言う。

それに比べミレイの方は歳相応なやや幼さを感じる口調で言う。

フィノラと一緒にいるからだろうか？会ったばかりのような途切れ途切れで怯えた様子の言葉使いではなくなっている。

「8歳か〜将来が楽しみだね」

「そうですね、実際はもつと長く生きているんですがね」

「そうなの？」

「はい、元元女神や神子・・・神子というのはお兄様達男性のことですが、私たちは普通の魔法に加え1人1つ、固有の魔法が使えます」

「へえ〜そうなんだ」

「私たち中に時の魔法が使える者がいますので、魔法を使い時間流から外れています、ですので歳などは基本取りません」

「それはすごいね、フィノラさんは何が使えるの？」

「私も時の魔法が使えます、後はもう1人お兄様の中に時の魔法が使える者がいます」

「そうなんだ、じゃあミレイちゃんの8歳ってというのは？」

「女神もある程度歳を重ねてから時間流から外れます、ミレイは今の最中です」

「そうなのか、ミレイちゃん、いっぱい大きくなるんだよ？」

「うんっ！」

女神にもいろいろあるんだなぁと思う。
そこまで聞いて1番の疑問を口にする。

「じゃあ結局はどのくらい生きてるの？」

「女性にいう言葉ではないと思いますが・・・」

「いいじゃん別に、気になるんだし」

「・・・年です」

「ん？何々？聞こえないよ」

「174年ですう！」

聞こえないといわれたのを気にしたのか、大きな声で叫ぶ。
が・・・ハツとしたかと思うと顔を赤くして手で顔を覆い、動
かなくなる。

「なあゝんだ、オバサンなんだね」

何気なくつぶやいた瞬間――

音を立ててフィノラが「うわゝん」と泣き崩れた。

そんなフィノラの様子を見てミレイがあわあわと慌てている。

それから数分、ひと通り泣いたかと思うとミレイからそつと差し

出された白い布切れをもらい涙を拭き、キツとこちらを睨みつけて・

・

「オバサンじゃないもん！」

何とまあかわいらしい声と言葉使いでいつてきた。

「でも174歳って・・・ねえ？」

小首をかしげて尋ねると、またもじわりとフィノラの目元に涙が浮かぶ。

「ああゝわかった！わかったよ！うん、オバサンじゃなくてお姉さんね！いよおっ若い！」

内心めんどくさいなあゝとか思いながらなだめると、次第にフィノラの表情も和らいでいく。

それからは、ぱぱっと食事を済ませてしまいちょっとしたブレイクタイムは終わった。

「あの・・・桂峰さん、どうしても頼まれごとは引き受けていただけませんか？」

食後の紅茶を飲みながら、不意にフィノラが口を開く。

「だってめんどくさいじゃん？」

「ですが・・・その・・・こうしてここに呼んだのは私たちであつてですね、その気になれば消すことも可能なんですよ？」

脅しに出てきたなあゝと思った。
ならば答えは簡単。

「別に消してくれても構わないよ。頼んだわけじゃないしね、それにぼくがいなくなったら困るのは君たちじゃないのかい？」

消すという脅しを受け入れればいい。

それに消えて困るのはむこうであってこちらではない、困らないのであれば元元呼ぶ必要がないはずだ。

「・・・・・・・・」

フィノラは黙ってしまった。

どうやら正解のようだ。

まあ、あまりにも聞き分けが悪いとホントに消されるかもしれないけど、そうならそうならでそのとき考えればいい。

「では桂峰さん、ごうしませんか？」

結んでいた口が開き、フィノラがいう。

「ん？なんだい？」

「もし、引き受けていただけたならば、成功したときの見返りとして……」

「見返りとして?」

「もう一度現世に蘇る、というのはどうでしょうか?」

「!」

破格の見返りだった。

現世への蘇生。

確かに悪くない条件だった。

フィノラは悩んでいる桂峰を見て、かすかに頬を緩め。

「明日の朝に部屋に来ていただけるとありがたいです」

そういい残し、紅茶を飲み終えたカップを食堂の奥へもっていき、戻ってくるとミレイと一緒に食堂を出て行く。

バタリ・・・と扉が閉まり、無音の空間に桂峰1人残される。

そんなことは気にせず、桂峰の頭の中では周りの無音な空気と違い、小さな桂峰があーだこーだと会議をしていた。

結局その夜は考えに考え、朝まで起きていて、そこでやっと考えがまとまったものだから朝に部屋に行くことが出来ず、フィノラに「女性の誘いを無視するなんて・・・」と文句を言われたのはここだけの話・・・。

第二十二話 桂峰とMystery World 5

今朝方は部屋にいけず、部屋に行ったのは昼を過ぎてからだった。そこで文句を言われたのはまあ置いておこう。

「結論は出たんですね？」

「うん、まあね」

眼を伏せ、静かな口調で言う。

この辺の清楚なあたりがさすが女神といったところなのか……。

「では、お聞かせ願えますか？」

「うん……、引き受けるよ」

「本当ですか!？」

嬉しそうに、そして安心したようにいう。

「よかったです……これで断られたらどうしようかと思ったいたんですが、本当によかったです」

ホッと安堵の息をもらす。

「まあね、色々あるんだよ」

「色々ですか？」

「うん、色々だね」

本当に色々あった・・・

どうするべきか考えているとき、死んだショックなのだろうか？
いろんなことを思い出した。

それを考えたらもはや考える余地はなかった。

「それでさ、ぼくはどこへ行けばいいんだい？」

「えっと・・・はい、この城を出て半日ほど歩いたところに大きな森があります」

「そこに行くの？」

「はい、それでその森の奥に大きな木があります、その木になる黄金の林檎を取ってきてもらいたいのです」

天界と黄金の林檎・・・お約束か・・・

「ふうんなるほどね、分かった、早速行ってくるよ」

「お願いします、案内はミレイに任せますので……城を出たところで待っていると思います」

「了解、それじゃーね」

軽く手を上げ部屋を出て行く。

そんな桂峰に笑顔で見送るフィノラ、その顔にはかすかに不安のいろがあつた。

――――

城を出た門のところでミレイはいわゆる体育座りの格好で座り込んでいた。

「やあ、おまたせ」

「あつ！桂峰さん、ここに来たってことは引き受けてくれたのですね！」

最初の頃とは大分変わった口調でいう。
どうやら警戒を解いてくれたみたいだ。

「うん、引き受けたよ、案内よろしくね」

「はいっ！お任せください！」

張り切った様子で言い、小さな歩幅で歩き出す。

それにあわせて桂峰も歩き出す。

そこで思う、このペースだと半日じゃ着かないのではないかと．．．と。

予想は的中、森に着くのに丸１日分の時間がかかったとさ。

第二十三話 桂峰とMystery World 6

草木をわけながら徐徐に薄暗くなっていく森の奥へと歩いていく。
ミレイは所々つまずきながら、それでもと一生懸命に小さな足で歩いていく。

その様子はとても微笑ましい。

「ねえねえミレイちゃん、黄金の林檎っておいしいの？」

黙々と歩くのがつまらい桂峰はミレイに言葉をかける。

「えーと、お姉様の話ではとてもおいしいらしいです」

「本当に？じゃあ余分にとってあとで食べようかな？」

「あつ、それはやめといった方がいいと思います」

「ん？どうしてさ？」

「お姉様が黄金の林檎は人間は食べない方がいいって言っていました」

「ふーん」

そんなことを話しながら森の奥へ進んでいく。

奥へ進むことにその暗さは増していく。

「そういえばさ、この世界にも魔獣とかいるの？」

「えっ・・・と魔獣とかはいないです、妖精さん達はたくさんいますよ」

「妖精かゝ会ってみたいな」

「あつ、でも気をつけてください、妖精の中には稀に『闇』にのまれて悪魔になってしまった妖精さんもいますので・・・」

「妖精から悪魔にねゝ、そうなるとどうなるの？」

「えっと・・・その・・・お姉様やお兄様がその・・・殺してしまいうらしいです・・・」

とても悲しそうな声でいい、その表情が暗くなる。

「ふゝん、それは大変だね」

「はい、だから桂峰さんも気をつけてくださいね」

「んゝ何に気をつけるの？」

「悪魔になった妖精さんはとても強いみたいで、お姉様やお兄様が全員でやらなきゃ手に負えないってお姉様が言っていました」

無理したかのように表情を明るくし、質問に答えてくれる。
とても優しい子だなあと思う。

「なるほど、それじゃ気をつけないとね、その悪魔になった妖精ってどんなの？」

「どんなの・・・と、いわれましても・・・あつ！ちょうどあんな感じのです！」

そう言つて指を差したのは・・・

全長3メートルを超え、黒い羽を生やし全身が黒い霧のようなモノで覆われた真つ黒な人型の悪魔と呼ぶにふさわしいモノだった。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「もしかして・・・アレって本物？」

「えっ・・・と、そう・・・みたいですね」

そついい合つてアハハハハと2人で囁れた声で笑いあふ。

ミレイの手をとり桂峰は走り出そうとする。
が・・・

ミレイがつまずき、転び　そのままぺたんつと座り込んでしまう。
 どうやら腰が抜けてしまったらしい。

「グアアアアアアアアアアア——！」

悪魔がもう一度咆哮をあげる。

ミレイはその声に「ひっ！」と声をあげる。

悪魔は歩きながら距離をつめてくる、そして腕を大きく振り上げ、思い切り振り下ろす。

「あああ——もうっ！」

吐き捨てるように言いミレイを抱きかかえ、思い切り地を蹴り大きく後ろに跳躍する。

その直後 桂峰とミレイのいた場所にズシンっ！とものすごい質量を感じるモノが落ちてくる。

そしてその場が大きく削り取られる。

「うわすうす」

後退しながら思わずつぶやく。

「さあ！いつつしょうたいむだ！」

発音の悪い英語を発しながら不適に笑う。

急転直下！ 悪魔VS桂峰の戦いが始まった。

攻撃を避けながらぶつぶつとつぶやく。

「座標効果変換・・・『加速』」

つぶやいた途端、羅針盤が激しく輝き半径500m程の陣が桂峰を中心に展開される。

「わお、懐かしいね」

身体が軽くなる感覚に思わず声を上げる。

――風水師――

それが桂峰の過去に身に着けた希少な職業。
方角、座標、星の並びを利用し、4体の精霊を使えさまざまな能力を駆使して戦う職業。

――

「グオオオオオオオオオオオ――！！」

喜んでいる桂峰のことなど知らずに、悪魔がすさまじい速さで距

離をつめ、蹴りを繰り出す。

「遅いよ、『縮地法』」

刹那・・・

桂峰の姿が消え、悪魔の蹴りは空を裂く。

『縮地法』・・・桂峰がサムライの職業だった頃のサムライ固有の移動技。

その名のとおり、一瞬で距離を縮める移動技。

それに加えの『加速』の効果、その速さを眼で捉えることは難しい。

「やつ！」

悪魔の蹴りを避け、一瞬で悪魔の足元へ移動した桂峰がその足に拳を叩き込む。
すると

「っ！？いったあああああ！」

あまりの痛さに殴った方の手をさすりながらその場でのたうち回る。

その光景はアホの一言である。

が、悪魔にも効いたのか、悪魔も叫びながらのたうち回る。

「ふっ・・・ふふっ、やるね〜君」

ふらふらと立ち上がり笑いながら言う。

が、その額には脂汗が滲んでいる、かなり痛かったらしい。

「本気で怒ったよ〜」

そう言っ、何もなところから一振りの刀を取り出す。

『暗器術』・・・過去に面白半分で身に着けてみた職業『忍者』
特有の技。

重いものでも簡単に運べるという便利さが売りの技。

「行つくよお〜」

思い切り地を蹴り、未だにのたうち回っている悪魔に一瞬で距離
をつめ、刀を振るう。

狙うは右肩。

「はっ！」

ザシュツ！と手応えを感じた。見ると胴体と右肩が切断され、地に落ちるのを見た。

「グオアアアアアアアアア——！」

未だ聞いたこともないほどの叫び声をあげる。
その声には痛みと怒りが混じっていると、聞いてて思う。
が、そんなことはどうでもいい・・・

そのまま無言のまま刀を振るい、切りつけていく。

徐徐にその速度は増していき、それと一緒に悪魔の叫び声も大きくなっていく。

「ガアアアア——！」

短く叫び片腕を力いっぱい振る桂峰を振りほどこうとする。しかし、それはいとも簡単にかわされる。

「悠久蒼穹流刀爭術——朧陽炎」

短くつばやき、一気に距離をつめ、知覚出来ないほどの速さで刀を振るう。

その斬線はバラバラで避けることは・・・まず出来ない。

「ガアアアアア！」

その数えるのも大変なぐらいの斬撃をくらい、叫び声をあげ、ドスンと音を立てて倒れこむ。

そのままピクリとも動かなくなる。

「ふう・・・終わったかな？」

一息つき、刀をしまいながらミレイを寝かせた木の元へ歩み寄る。ミレイを見ると安らかな寝息を立てながら眠っている。その様子を見ると心が安らぐ。

「おゝい起きて〜」

呼びかけてみるが返事はない。

「しょうがないなあ・・・もう・・・」

言葉を漏らすと疲労がドツと身体を駆け巡るが、どうにか耐える。そのまま眠っているミレイをいわゆるお姫様抱っこで抱え、文句

を言いながらも森の奥へと進んでいくのであった。

第二十四話 桂峰とMystery World 7 (後書き)

今回は戦いと昔に覚えた技を書いてみました。

昔のことはいずれまた・・・

感想などありましたらドンドンください！

第二十五話 桂峰とMystery World 8

森の中を黙々と歩いていくと時々ミレイが可愛らしい声で呻きながら桂峰の腕の中でモソモソと動き、少し経ったときパチリと眼を開けた。

「おはよう」

「……………あつ……………おはようございます」

挨拶を返してから数十秒して意識がはっきりしたのか、眠たげな表情から普段の表情に変わっていく。
そして自分の状態を見て顔を真っ赤にし、慌てた声を上げながら腕の中で暴れまわる。

「ちよっ……………いきなり暴れると危ないじゃないか」

暴れるミレイをそつと地面のに降ろす。

「あのっ……………その……………お役に立てずごめんなさい！」

顔を赤くしたままペコリと頭を何度も下げてきて、何度も謝ってくる。

「気にしてない・・・っていったらウソになるけど、そんなに謝らなくてもいいのに」

「でも・・・」

「過ぎたことだし、無事だったんだから結果オーライってヤツさ」

「・・・・・・・・」

納得いかない様子ではあったが、これ以上めんどくさいことにならないようにするため、この話を打ち切る。

疲れてるんだよ・・・動き回ったおかげでね・・・

「そっだミレイちゃん、あとのくらいで着くのかな？」

「えっと、ここまで来ましたしもうすぐだと思います」

「やっとかゝって、お？もしかしてアレ？」

そう言って前方に指を差す。

その先には黄金色の林檎がいくつかなっている木がある。

「あっ、そうです！アレです！」

興奮気味な口調でミレイがはしゃぎ出す。

小走りで木に駆け寄り、無造作に林檎を1つもぎ取る。

「何個くらいあればいいの？」

「だいたい3個ほどくらいで大丈夫だと思います」

「了解」

そうして、もう2つの林檎をもぎ取る。

これであとは持ち帰るだけだ。

「よし、用事も済んだし行こうか」

「はいっ！」

笑ってみせながら発した言葉にミレイが元気良く返事を返す。
こういつふうに返してもらえると気分いいよね。

――――

それからまた何時間もかかる道のりを2人で歩いていく。

帰りの道は何もなく、無事に城にたどり着いた。
平和が一番、そう思いませんか？

「あつミレイ、桂峰さん、お帰りなさいです」

城門の前でフィノラが帰りを待ってくれたいた。

「お姉様、ただいまです」

「ただいま、フィノラさん」

ミレイは素晴らしい早足でフィノラの駆け寄り、バツと思い切り抱きつく。

フィノラはそれを優しく抱きとめる。

ああ・・・美しき姉妹愛・・・

「それで、林檎の方は・・・？」

ミレイを抱きかかえたままフィノラが尋ねてくる。

「ここに、あるよ、3つほど」

懷から黄金に輝く林檎を取り出す。
それを見たフィノラの表情がほころぶ。

「はい、フィノラさん」

「この度はどうもありがとうございます」

「いや、気にしないで、約束だからね」

「約束ですか・・・そうでしたね、蘇生の準備には1日ほどかかるので待っていただけますか？」

「うん、よろしくね もう疲れたから今日はゆっくり寝かしてほしいんだけどいいかな？」

「はい、ゆっくりお休みください」

笑顔で答えるフィノラに軽く手を振り、そのまま城の中に入り、客間みたいなところにあったソファに横になる。

途端、ものすごい疲労が再び襲い掛かり、いつの間にか意識が途絶え眠りについていた。

――――

「ミレイ、桂峰さんは眠ってる？」

「はい、そりやもうぐっすりと」

静かな食堂でミレイとフィノラの声が響く。

「桂峰さんが余分に取ってきてくれてラッキーだったわ」

「お姉様・・・コレゝそんなにおいしいの？」

食堂のテーブルに置いてある皿の上にあるのは林檒。
黄金に輝く林檒だった。

林檒は6つに切り分けられている。

「美味しいなんてものじゃないわよゝもう言葉に出来ないくらいに」

「そんなにおいしいんだ！？、でも・・・桂峰さんに悪くないですか？」

「ええ・・・でも桂峰さんが食べたら・・・きっと全部食べちゃうわ」

「うう・・・それはイヤですう・・・」

「だ・か・ら、これは内緒よ」

フィノラは微笑み、ウインクを1つしフォークを手に取り林檎を口に運ぶ。

それを見たミレイも林檎を口に運ぶ。

「「!」」

言葉に表すことの出来ない甘さが口の中に広がる。

2人の表情が眼に見えて緩む。

ああ・・・幸せ・・・

秘密のスイートブレイクタイムは優に1時間を超えた。

第二十六話 桂峰とMystery WorldのFinal

どこからか物音がし、その音で目が覚める。

目覚めは中中よく、よく眠れたらしい。

近くの開けはなたれた窓から心地よい風が吹きそれがまた気持ちがいい。

「ふわあゝ・・・」

ソファから身を起こし、大きく欠伸をこぼす　と、ふと声がかかる。

「あつ、おはようございます」

「え？あゝおはよう？」

声をかけてきたのはフィノラ、突然の挨拶に思わず疑問形で返してしまう。

「フィノラさん？何してるの？」

「いえ、桂峰さんを起こそうと来たのですが、あまりにも気持ちよさそうに寝ていたものでどうしようかと思っていたところです」

くすり、と笑いながらフィノラが言う。

「そうだったんだ・・・で、何かよう？」

「あ、忘れていました、あの・・・寝起きのところ申し訳ないですが、時間はありますか？」

「うん？別に大丈夫だけど」

「そうですか、よかったです ではついてきてください」

そう言い終え、かがんでいたフィノラは立ち上がり、ゆっくりと歩き出す。

ソファーから起き上がり、桂峰はそのあとを追う。

「ねえねえ、どこに行くの？」

「城を出て少し行ったところに祭壇があります、そこに」

「ふん、了解」

そのまま肩を並べて歩いていく。

――

「わーこれはきれいな眺めだね」

城を出て数分歩いたところにフィノラの言ったとおり祭壇があった。

祭壇のあるところは丘になっており、遠くまで見渡すことができる。

そこから見えた景色はとてもきれいな眺めだった。

「ええ、私のお気に入りの場所です」

「うん、絶景だ！いいものが見れたよ　ありがとう」

「いえ、喜んでいただけて私も嬉しいかぎりです、ありがとうございます」

「ははは、それはどうも　それより用事はこれだけかな？」

「・・・相変わらず、話が早いんですね」

「ぼくは先読みの力がデフォルトで備わっているからね」

「またご冗談を」

遠くの景色を眺めながら2人で笑いあう。

と・・・そこでフィノラの表情が険しくなり、その口が開かれる。

「桂峰さん、ここに残りませんか？」

「ハッハッハッ、ないすじょーく」

「冗談ではありません、私はここに居てほしいと本気で思っています」

「マジで？」

「マジです」

キツパリと言い切られる。

その眼は真剣でどうも返事がしがたい。

桂峰は「うーん」と唸りながらわしゃわしゃと頭をかき、黙りこむ。

「・・・・・・・・」

そして数十秒経ったとき、その口が開かれる。

「いや、ダメだ、ぼくは生きたい」

「どうしてもですか？」

「どうしてもさ」

「・・・そうですね、そう言っと思ってました」

「うん、ごめんね」

「いえ、謝らないでください 元々私の我儘ですので」

「そっか、じゃあー」

「はい、もう一度生き返り、楽しい人生を送ってくださいね」

ニッコリと微笑むフィノラ。

今まで見たどの笑顔より美しく、悲しそうな笑顔だった。

そしてくるりと向きを変え、祭壇へと歩み寄り、その中央に立つ。

「では、儀式を始めます」

そうフィノラがつぶやくと手を胸元に置き、何やら呪文を唱え始める。

それと同時に足元に輝く魔法陣が現われる。

「『リバイブ』」

静かにフィノラの声が響く。
その瞬間――

桂峰の身体が黄金の光に包まれ、徐々にその身体が薄れていく。

「色々ありがとうね、フィノラさん」

「また・・・またお会いできますよね？」

フィノラの声は涙声だった。

そんな彼女にどう答えていいかわからず、適当に言葉を搜す。

「またぼくが死んだらきっと会えるんじゃない？」

「縁起でもないことを言わないでください」

頑張って見つけた言葉は一言で切り捨てられた。

「じゃあね、いずれまた」

そう言い残し、桂峰の姿は完全に消えて、その場には1人の女神だけが残った。

第二十六話 桂峰とMystery WorldのFinal（後書き）

どうしたもんか思いながらも頑張りました。
感想などありましたらぜひ ください。

第二十七話 桂峰とMystery World 外伝

生を与えられ、天界を去っていった男が立っていた場所を見る。
先ほどまでここにいたのだな・・・と思う。

だが、いなくなったものはしかたない・・・そう思いその場から背を向け歩き出す。

その背中はどこかすすけている。

「よっ！どうしたんだ？」

歩いていると木の影から声がかかる。

その声の主はカイル・マナハート、フィノラ達の兄の中の長男だった。

カイルが木の影から笑いながらその美しい金色の長い髪を揺らしながら歩いてくる。

「おいおい、そんなしよげてんじゃねえよ、俺達神子や女神がそんなでどうするよ？」

「大丈夫です、しよげてませんから」

小声でフィノラはつぶやき、そのままふらふらと歩き出す。

が・・・歩き出し少ししたところでフィノラがつまずき、転ぶ。

それを繰り返しながら城へと帰っていくフィノラを見ながらカイルは口を開く。

「全然大丈夫じゃね〜な・・・」

もつともな言葉だった。

――――

城に戻ると、中庭で妹のミレイと次男のギル・マナハートが戯れていた。

ややアレ気味の・・・現代の最先端病の通称『ひつきー』である彼にしては珍しいことだ。

「ギルお兄様〜次はかくれんぼしよう〜」

ミレイが楽しそうな声ではしゃいでいる。

「wwwおk、じゃ俺が鬼やるからw」

ギルは笑いながらそう言って、「い〜ち、に〜い〜」と数え始める。

ギルは大の『いんたーねっと』好きで、趣味は『ねとげ』という

典型的な廃人である。

そんな彼がミレイと遊ぶなんて天変地異の前触れか・・・

「ギルお兄様、何してるのですか？」

「じゅうよーん、って???、ああーフィノラか、ギガワロスwww
w！何を言ってるんだよ君は」

「は・・・はあ・・・」

「見てわかんないのか？OFF友と気持ちよく遊んでんだよwww」

「お・・・OFF友・・・？あのミレイは友達ではなく妹なのですか・・・」

「お前の発言ワロスwwwそんなの気にしてんじゃねえよ」

何かに染まりきった言葉を巧みに使い、ギルが言う。

ギルとの会話は異様に疲れる。

「外で遊ぶなんて珍しいですね、何かあったのですか？」

「今までやってたゲームをかんプリートしたからな、たまにはテラ
カワユスな妹と遊ぶのも悪くないと思ったんだよwww」

「そうなんですか・・・それは邪魔をしました、すいません」

金色の髪をふさあ〜と掻き揚げてカッコつけながら言う。

内心めんどくさいなあ〜と秘かに思いながら、銀色の髪を揺らしながらフィノラはペコリと頭を下げる。

そして、若干早足でその場を去ろうとする。
が・・・

「そういえば、あの人間はどうしたんだ？」

ギルから声がかかる。

「・・・気づいてたのですか？悟られないように呼んだのですが・・・」

「あれだけ森で暴れれば気づくだろwwwワロスwwwワロス」

「・・・・・・・・」

「ま、その様子じゃ生き返らせたんだな、嫌々みたいだけど」

「嫌々じゃありません、彼がここに残ってほしいと思ったのは私の我侭で、元々の約束は生き返らせることでしたので」

「ふ〜ん そうかい、ま、かなり力を使っただから少し休んどけよ?。」

それだけいい残し、ギルは「いっくよぉ〜」といいながらミレイを捜しに行ってしまった。

「・・・そうですね、今日はもう休むことにします」

ポツリとつぶやき、フィノラはそのまま部屋へと歩き出す。

部屋に戻ったフィノラは、そのままベッドに倒れこみ眠りに落ちた。

また会えると信じてーーーーー

第二十八話 イヤよイヤよも好きのうち（前書き）

少し戻って現世の方を書いていきたいと思ひます。

第二十八話 イヤよイヤよも好きのうち

カツラミネさんの遺体がなくなって2日が過ぎた。

シヨックが大きいからか、皆どこか身体から力が抜けている。

そんな中イシムネさんだけはいつもと同じように過ごしていた。

さすがは総大将様といったところか、大事な役職からか弱いところを見せられないのだろう。

「やあおはよう！今日もいい朝だね！」

パンツとわたしのいる部屋の扉が勢いよく開かれる。

女性の部屋をノックなしで開けるのはどうかと思ったが、ツッコむ氣力がわかない。

「さあ今日という1日を楽しもうじゃないか！ハッハッハッハッ！」

そういつてうねうねと気持ち悪い動作をしながら高らかに笑い出す。

その笑い声のせいで一緒に寝ていたティルちゃんが目を覚ます。

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

笑い声がよりいつそう大きくなる。

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

またも高くなる。

「ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ！」

「うるさいぞボケエ！」

「へぶう！」

高らかに笑っていたイシムネさんがハイドさんの蹴りにより吹っ飛ぶ。

声のうるささにハイドさんが起きてきたのだらう。

見るとその横にはちよつと不満げな様子のエリナちゃんもいる。

エリナちゃんもか・・・

「まったくいきなり何するんだ、ひどいねえ」

「黙れ、お前が朝っぱらから騒ぐのが悪い」

「ハッハッハア、まあいいや、思ったより元気そうでよかったよ」

「ああ、誰かさんのおかげでな」

「それはなにより、それより聞いてくれよ、いい知らせだ」

「どうかしたんですか？」

いいニュースと聞いてティルちゃんとエリナちゃんが反応を示す。

「まあそう焦るな、それでな明日には俺の仲間が到着するらしいんだ、そうすりゃ桂峰のことで何か分かるかもしれない、と、君ら以外の奴隷の暮らしを確保したことゝかな？」

その言葉を聞いて一同の表情がやや明るくなる。
もちろんわたしも。

「だが悪い知らせもある、君らには直接は関係ないことかもしれないが近々戦争が起こる」

「戦争！？」「」

「そうそう、戦争」

「どうしてそんな急に戦争なんて！？」

驚きのあまり、思わずわたしは大声を出してしまう。

(でも・・・本当に急すぎるわ・・・)

「本当に急だね、でも理由は分からないんだ」

「どこが仕掛けてきたんですか？」

「レーヴァルだよ」

「レーヴァル・・・レーヴァルってあの最近になっていきなり変わったっていう」

「そうだよ、先代の当主が死んでから大分変わったな、悪い意味で」

「戦争はいつ始まるんですか？」

「いつ・・・ってのは分からないな、でもいつ始まってもおかしくない状況でもあるね」

「そうなんですか・・・」

「気まずい空気が流れる。」

「じゃ、俺達はどつするんだ？」

「そんな空気の中最初に口を開いたのはハイドさんだった。」

「どうしてもくてもかまわない、エヴァンを離れてもいいしここで戦争が終わるのを待っててもいい、だけどこの戦争に戦力として参加してくれるというならこれほどありがたいことはないな」

ハイドさんの問いに答えるイシムネさん。
その口調はいつになく真剣だった。

「ご主人様ならどうしていたでしょうか・・・？」

エリナちゃんがつぶやく。

「どうするかな？あいつならめんどくさいとか言いそうだな」

はははっ〜とイシムネさんが笑いながら言う。

「でも、きっと手伝ってくれると俺は思うな」

「いや、旦那ならわからんぞ」

「カツラミネ様はよく分からない人ですし」

ハイドさんとティルちゃんが言う。

（確かに・・・あの人が考えてるか分からないものね・・・）

「でもご主人様はやる時にはやる人だと思います」

「そうね、だからカツラミネさんが帰ってきたときに顔向けできる
ようわたし達も頑張らないとね」

一同がうんうんとうなずく。

「意外だな、アイツってこんなに信頼されてるのか？」

「そうみたいです」

「じゃあ手伝ってくれるのか？命の保障はないぞ？」

そんなもの百も承知だった。

だが、それでもみんなは戦う気だ。

「わかった、君らのその意思に感謝する、共に戦い勝とうではない
か！」

その言葉に皆、真剣な表情でうなずくのだった。

第二十九話 古いテレビは叩いて直そう

戦争に参加からには、やはり強くななくてはならない、そして勝たなくてはならない。

そう思ったのか、昼からそれぞれが訓練を始める。

ハイドさんは最前線で戦うらしい。

今となつては希少な種族でもある竜人は人間と比べればかなり能力に差があり、居ると居ないでは大分違うらしい。

ハイドさんは兵士達に混じって訓練に励んでいる。

エリナちゃんは魔法部隊の中に混じり、後方で援護、負傷者の治療の仕事をするらしい。

エリナちゃんは準備がある、このことで部屋にこもっている。

元々魔法の扱いにたけているので心配はないだろう。

ティルちゃんも魔法部隊、ただし大型魔法を使う特殊な部隊だ。大型魔法を唱えるには莫大な量の魔力、それに伴う人数が必要とされ、入隊できる兵士も限られているので人数が少ない。

そんな中でティルちゃんの魔力の量は驚くほどの量だった。

大型魔法は大抵十数人で唱えるモノで、唱え終わり次の魔法を撃つためには早くても2時間はかかるという。

しかしティルちゃんの魔力の量だと1人で10回は余裕で唱えられるほど莫大だった、しかも休憩なしで。

が、大型な魔法なので魔法陣を形成する必要があり、ティルちゃんは魔法陣について勉強している。

わたし、ラクアは魔法剣士部隊。

臨機応変に前線に出て剣を振るったり魔法を撃つか、後方に下がり魔法を撃つか援護に回るという中中重要な役割である。

わたしは他の兵士とは剣の扱い方が違うので、個人的な練習をしている。

「はあっ！」

わたしは城の大きな広場で剣を振るう。

剣を振るうたびにビュンッと空気を裂く音が響く。

「ふう……」

一通りの型を終え、休憩をいれる。
すると背後から声がかかる。

「よっ、お疲れさん！」

「あっ……イシムネさんか……どうしたんですか？」

テンシヨンの高いイシムネさんが声をかけてきた。
汗を拭きながらわたしは言葉を返す。

「いや、別に大した理由じゃない、どんなことしてるのか気になっ

ただけだな」

「そうですか・・・」

「そうだ、聞きたいことがあるんだがいいか？」

「ええ、どうぞ」

「アンタ、この世界の存在か？」

「・・・どういう意味ですか？」

「ふむ・・・いや、何でもない 忘れてくれ」

「は・・・はあ・・・」

（どうしたんだろう？）

わたしの答えに納得したのか、「まあ引き続き頑張れ」と一言いつて去ってしまった。

（本当にどうしたんだろう・・・？）

と、考えても分からなかったので休憩を終え、また練習に戻る。それは日が沈むまで続いた。

第三十話 妖怪に要かい？ いえ、要があるのは精霊です

剣を振るい、汗を流したわたしはあたりが暗くなったことに気づき、城に戻ることにした。

城に戻り自由に使つていいと言われた大浴場にそのまま向かい、汗を流すことにした。

ガラガラつくと浴場のドアを開けると2人の人影があつた。湯煙で少々見にくいだが、どちらも見たことのない人だつた。

「あの・・・こんばんわ？」

「あつ・・・こんばんわ」

「ん？こんばんわあ、いい湯ですよ」

「は・・・はあ・・・」

とりあえず声をかけてみると挨拶を返してくれた。

それからは特にかける言葉もないので無言のままシャワーからお湯を出し、汗を流し身体を洗う。

そうしていると――

「あのおゝ貴女は誰ですかあゝ」

不意に声がかかってきた。

「ちょっと星奈さんっ！いきなり失礼ですよ！」

確かに失礼であった。

が、そののんびりとした声を聞くとどうしてか？不快に感じなかった。

「えっと、わたしはラクア・ローレンスです、あなた方は？」

「あつ、ご丁寧にどうも・・・私は雪咲 雅と申します」

「私は巡夜 星奈でえゝす」

（ミヤビさんにセイナさんかゝ珍しい名前だなゝ）

「あつ星奈さん、時間です そろそろ行かないと」

「ええゝもうそんな時間ゝ？」

「そうです、行きますよ、ラクアさんゝでしたっけ？また会いましょうね」

ニコリと笑いそう言って、ザバッと勢いよくミヤビさんが立ち上

がり、嫌そうな顔をしているセイナさんの手を取り、引つ張つていく。

ドアのむこうから「あゝれゝゝ」と、セイナさんの茶目つ気な声と「変な声出さないでくださいっ!」と、ミヤビさんの叱るような声が聞こえた。

わたしは1人、静かに浴槽に浸かった。

――――

それから10分程してから大浴場からあがり、服を着、頭をタオルで拭きながら大浴場を後にする。

その足で皆がいるであろう食堂へと向かう。
するとそこにはいつもの面々に加え、ミヤビさんにセイナさん、それと見知らぬ男性がいた。

「あつ!ラクアさん!」

セイナさんがわたしを見てミヤビさんが声をかけてくる。

「何だ? みやびん、もう知ってたのか?」

イシムネさんが意外そうな顔で言う。
妙にかわいらしいあだ名で。

「おい、こいつらは何者だ？」

ハイドさんが難しい顔で口を開く。

「みんなは昔から？の友達だ、予定より早く来れたみたいだな、でこの小さいのが雪咲 雅、そしてこちらのナイスボディーなお方は巡夜 星奈さん、でまあこっちの男は伊志井 将とか言うヤツね」

「小さくないです！これでもすくすく成長してます！」

「ナイスボディーだなんて、お世辞でも嬉しいくなあ」

「俺の紹介適当じゃね！？」

イシムネさんの紹介にそれぞれが口を開く。

まあイシムネさんの紹介が適当なのがいけないのだけど・・・

「ふん、てえことは旦那について調べてくれるのか！？」

カツラミネさんのことに関係があると分かり、ハイドさんの口調が激しくなる。

ティルちゃんやエリナちゃんも声は出していないもののそわそわし

てる。

「まあそれもある、星奈さん、来ていただいて早速でなんですがいいですか？」

「りょくかい」

どこか気の抜けた返事をしたセイナさんがなにやら唱え始める。

「電子の精霊よーー我が呼びかけに答えたまえっ！」

掛け声と共にセイナさんの身体の周りが光り輝く。

「召喚！ハイム！」

パツと一瞬光が増し、消えた頃には1体の小型の淡く青色に輝く人型精霊がふよふよと飛んでいた。

容姿は小さな女の子で、その姿に思わず見惚れてしまった。声を発するものは誰も居ない。

「ハイム、精霊のネットワークに接続できる？」

そんな中、先ほどから口調が変わったセイナさんが口を開く。

「肯定→接続します」

精霊が坦々と返事をする。

その様子はどこか機械的だ。

「完了→接続に成功しました」

「本当？じゃあその中で桂峰くんに関する、またはそれと思われる情報はない？」

「検索→検索結果、該当するものが2件見つかりました」

「内容は？何かに映せない？」

わたしたちはセイナさんと精霊のやり取りを黙って見つめている。セイナさんの問いに応じたのか、精霊が何もない空中に見たこともない妙なものを映し出した。

ハイドさんもテイルちゃんもエリナちゃんも驚きの表情を見せている。

もちろんわたしもビククリだ。

あとでイシムネさんに聞いたところ、『でいすぶねー』というもののらしい。

「ありがと、じゃあ1つ目を読んでくれる？」

「了解」

題：8時とか関係ない！精霊集合

管理人：上位金剛精霊・ロッツ

プロフィール：金持ちの二枚目

最近の悩み：歯槽膿漏・・・

」

「ストップ、飛ばしてくれる？桂峰くんに関係ありそうな内容を読み上げて」

もつともな言葉だった。

大体自分で「金持ちの二枚目」って言ってる恥ずかしく何かしら？

最近の悩みに至っては歯槽膿漏・・・精霊にもあるんだ・・・。

「了解」読み上げます

記事：いやあ〜久しぶり〜みんなのアイドル、ロッツだよ。

今僕は人間観察にハマってます！人間て面白いよね〜、この前なんか森の中で黒い服装の長身の男がよく分かんないけど襲われてたみたいだったぜ！ははは〜ざまあ！人間なんて所詮欲におぼれた薄汚い種族だからね〜気分爽快！すっきりさっぱり〜！今度はどこに観察しに行こうかな〜？わくわくだぜ！・・・
以上です」

「・・・・・・」

その内容に一同、無言のままだ。

イシムネさんとイシイさんは額に青筋を立てている。

「こいつ、いつか殺す・・・」

すごく低い声でイシムネさんがつぶやいた。
その声はものすごくゾツとする声だった。

第三十一話 ドリルはみんなの憧れさ

「どうします？、この金剛精霊を呼んでみます？」

セイナさんがイシムネさんに呼びかける。

すると、今まで金剛精霊の悪口に不機嫌な顔をしぶつぷつと何かを小言でつぶやいてたイシムネさんの表情が爽やかな笑顔にパツと変わった。

「で、出来るんですか？」

「うん、名前とどんな精霊が分かってるから簡単だよ」

「じゃ・・・じゃあ、お願いしちゃおうかな？」

やや頬を赤らめたイシムネさんが言う。

鼻の下を伸ばしていて、正直気持ち悪い・・・

同じ様に思ったのか、ティルちゃんにエリナちゃん、おまけにミヤビさんまで白い目を向けながらさり気なく遠のいていく。

「りょうかい、金剛の精霊よーー我の呼びかけに答えたまえっ！ 召喚！ ロツツ！」

一瞬だけ何も無い空間が光り輝き、光がなくなっただころには分

厚い鎧でも着込んでいるかのような人型の精霊がいた。

「うお！？な・・・なんじゃここは！？」

見かけに似合わない高い声で驚きの声をあげる金剛精霊。

「よぉ～精霊さんよ、好き勝手言ってくれてよ、覚悟は出来てんだろうな？」

そんな金剛精霊に鬼の形相で詰め寄るイシムネさん。

「なっ！き・・・貴様らは人間か！？近づくな！汚らわしい！」

「ほぉ～言ってくれるじゃねえか、その汚らわしい人間に今からボコボコに気分はどうだい？」

「何だと？ふ・・・ふんっ！貴様らなんぞに負けるオレっちではない！返り討ちにしてくれるわ！」

「そうかいそうかい、おい将、こいつお前に好きにしていいで、ありがたく思え」

「はいはい、ありがとさん」

壁に寄りかかっていたイシイさんがイシムネさんの言葉を軽く流しながら金剛精霊に歩み寄る。

「き、貴様が相手か・・・今なら泣いて謝れば許してやるぞ？」

「黙つとけ、それはこっちの台詞だよ」

「ふんっ！愚か者めが！後悔するがいい！」

そう大声で叫び、腕を振り上げ金剛精霊が殴りかかる。

対して、イシイさんはいつの間にか手に持っていた結晶を握力で砕いた、すると手のひらが光に包まれる。

「遅いね」

小声でつぶやき、体を反らしただけで金剛精霊の拳を避け、光に包まれた手を金剛精霊の当てる。

すると、バチバチと電気のようなものが金剛精霊の身体を巡り、淡く光ながら形を変えていく。

「え！？あつ！？ちょ・・・そこは！あ・・・ぬほう・・・」

気持ち悪い声をあげながら形を変えていった金剛精霊が、床と一体化した。

「これで動けないだろ？」

「き・・・貴様！いったい何をした！？」

「錬金術だよ、しかも初歩の初歩の『組み合わせ』だよ」

「錬金術だと！卑怯者！正々堂々戦いやがれ！」

「やだ、めんどい」

「っ！」

金剛精霊の言葉を聞き流しながら、余裕の笑みで見下すイシイさん。

それを悔しがるように見上げる金剛精霊。

「さて、これからどうしようか？」

「まっ、待て！落ち着くんだ！話せば分かる！」

「問答無用」

その後は・・・

見るも無残な光景だった。

ティルちゃんなんかエリナちゃんの服に顔をうずめて震えていた。

――

「いやゝいい汗かいたな」

ふうゝと一息ついて爽やかな笑顔で言うイシイさん。
ちなみに汗は微塵も出てきてない。

その足の下ではボコボコになった金剛精霊が唸っている。
その声に元気の欠片もない。

「さて、次は俺が行くか」

パンつと手を合わせながらイシムネさんがとんでもない事を言う。
その言葉に金剛精霊は「ひっ！」と声を漏らす。

「豪君、その辺でやめましょう、さすがに可哀想だよ」

そんなイシムネさんにむかって、セイナさんがいう。

「おお！こんな精霊にも優しくするその姿！すばらしい！分かりました星奈さん、今日はこの辺にきましよう、おい精霊！心の広い星

奈さんに感謝しな！」

ものすごい変わりようだな〜と思った。

「ありがとうねっ、豪君」

語尾にハートマークでも付けたかのような愛らしい口調で言っせイナさん。

イシムネさんは「はう〜！」と声をあげ、ふらふらとその辺にあったイスに倒れこむ。

その顔はものすごく赤くなっている。

「じゃ、精霊君も帰っていいから、ばいば〜い」

そんなイシムネさんのことは気にせず、マイペースに話を進め、金剛精霊を精霊界に帰していく。

きつとセイナさんは天然さんなんだな・・・と思った瞬間であった。

第三十二話　こ・・・これはっ！魔女の婆さんの呪いか！？

「それじゃゝ次のヤツを見てみようかゝ」

金剛精霊を精霊界に戻したセイナさんが言う。

「ハイムゝハイムゝ？」

セイナさんが電子精霊を呼ぶが返事がない。

「あ・・・あのゝ星奈さん、これゝ」

そんなセイナさんにミヤビさんがおずおずと声をかける。
その頭にはぐっすりと気持ち良さそうに眠る電子精霊がいる。

「ハイムうゝダメでしょゝもう」

眠っている電子精霊をこずきながらセイナさんが声をかける。
電子精霊はこずかれ、目を覚ます。

「・・・・・・・・あつ、すいません　眠ってしまいました」

その声は機械的だが、表情は申し訳なさそうにしている。
そんな電子精霊が謝罪の言葉を述べる。

「うつんいいよ、じゃあ次のヤツよろしくね」

「了解」読みます

題：G I R Uの部屋

管理人：不明

プロフィール：好きなアニメはガンダム、好きなゲームはファイナルファイト、そんなどこにでも居るヤツさ

最近の悩み：妹がかわいすぎる！・・・」

「ごめんなさい、飛ばしてくれる？」

「おいおい、今回もはずれかあ？」

その内容に少々苛立った様子でいうイシムネさん。

ハイドさんも足をゆさゆさと揺すっている、気が立っているみたいだ。

「了解」飛ばします

記事：やつぽーG I R Uです。

最近マジでやばいです、何がやばいかって？妹がかわい過ぎるんだよ、やべえ！

走ってる時に揺れるスカートから見えた絶対領域マジばねえ」

！絶しますよ！？

ああゝヤバい！あの絶対領域が眼にやき付いちまって離れないぜ
！・・・」

「おい、こいつもぶっ飛ばしていいか？」

「いいんじゃないか？」

何やらイシムネさんとイシイさんが物騒なことをつづやいている。
まあ・・・確かにそう言いたくもなるだろうけど・・・。

「ちょっと待って、まだ続きもあるし」

セイナさんが2人をなだめる。

「ハイム、続きを読んでくれる？」

「了解」

記事：そういえば、何やら俺らの領域に人間が迷い込んできたらしい。

どんなヤツかって？そうだなゝ何か、黒かったな。

最初はでかい『G』かつ！？とか思ったけど人間だったんだよ。
珍しいよねゝ人間がこつちの世界に来るなんて。

まあ俺の邪魔しないならどうでもいいんだけどね・・・」

「これは・・・当たりか？」

「かもしれんな」

「確かに・・・この人、黒いらしいですし」

イシムネさんとハイドさん、エリナちゃんが口々に言い合う。

「星奈さん、コイツ呼べないっすかね？」

イシイさんが口を開く。

「ううゝん、難しいかも・・・」

「どうしてさ？」

「名前も不特定だしゝ、どんな存在かも分からないから」

「そうか・・・」

どうやら呼び出すのは無理らしい・・・
どうしたものか・・・

「あ、でもコンタクトは取れるみたいだよ？」

「どうやって?」

「コメントを送るの」

「・・・現代的だな、精霊界も」

しみみりとイシイさんがつぶやく。
その視線の先はどこか彼方。

「じゃ・・・じゃあ星奈さん、やってみてくれませんか?」

イシムネさんがいう。

何故かイシムネさんはセイナさんと話すとき鼻の下が伸びたり、
頬を赤らめたり、もじもじしたり、言葉がにごったり、息が荒かっ
たり・・・

正直ものすごく気持ち悪い。

「うん、わかった、やってみるね」

そんなイシムネさんの様子にはまったく気づかない様子で言葉を
返すセイナさん。

この人はこんなんで大丈夫なんだろうか・・・・・・?そう感じ
たのはわたしただけだろうか?

第三十三話 勝者いるということは敗者もいるのさ

手がかりを見つけてから約1時間。

セイナさんとセイナさんの召喚した電子精霊は空に浮かぶ『でいすぷれー』とかいうものと睨めっこ。

イシイさん、ミヤビさん、それにハイドさんやエリナちゃんやテイルちゃん、加えてわたしは皆でちょっとしたゲームで遊んでいる。カツラミネさんのことがあってから、皆暗い顔をしていたが、今はそうでもないらしい。

前向きになるのはいいことだ。

「じゃあ俺、緑の1ね」

イシイさんが緑色で『1』と書かれたカードを出す。

「それじゃあ、私は赤の1を」

ミヤビさんが赤色の『1』と書かれたカードを出す。

「ちよっ！マジかよ、色変えんなよ・・・」

色を変えられ、出せるカードがないらしいハイドさんが文句を言いながら山札からカードを1枚引く。

「次は私ですか・・・、ティルちゃん、ごめんなさい」

申し訳なさそうにしながらエリナちゃんが赤色の『S』と書かれたカードを出す。

「ううゝ・・・」

自分のターンが飛ばされたティルちゃんがむすーと頬を膨らませる。

「あつ、わたしか、イシイさんごめんなさい」

一応謝りながら黒色で赤、青、緑、黄、の色と『+4』と書いてあるカードを出す。

これは自分で色を選び、なおかつ相手に4枚引かせるスペシャルカードだ。

「ごめん、雅さん」

イシイさんも持っているらしく、同じ黒いカードを出す。

「えっ・・・と、すみません、ハイドさん」

本当に申し訳なさそうに言い、ミヤビさんも同じ黒いカードを出す。

「ちよっ！待てよ！いくらなんでも酷いだろーがっ！」

叫び、悔しそうな顔をしながらカードを12枚引くハイドさん。
何だか少し可哀想・・・

「あと、色は黄色で私UNOです」

ミヤビさんが付け加える。

わたし達がやっているのは『UNO』という見たこともない聞いたこともないカードゲーム。

同じ色か数字を出して、一番最初に手札をなくすというシンプルなゲームだが大勢でもできて楽しめるすばらしいの一言につきるモノだった。

セイナさんと電子精霊が『でいすぶれー』と格闘している間、「暇だから何かしない？」という、イシイさんの一言から始まったものである。

「次は私ですか・・・では黄色の7を」

「テイルの番だね？ええくとね、黄色の0で」

「わたしか〜じゃあ・・・」

「みんな〜ごめ〜ん、ダメみた〜い」

わたしが黄色の『5』を出そうとしたとき、セイナさんが声をかけてきた。

その声には、「お手上げ」と言わんばかりの響きがある。

「ダメってことは、繋がらなかったのですか？」

エリナちゃんが確かめるようにいう。

「うん、ごめんね」

素直に謝罪するセイナさん。

その表情はとも申し訳なさそうだった。

それに、頑張ってくれたセイナさんを責める者は誰もいない。

「いえ、そんな謝らないでください、事実はどうか分かりませんが希望が見つかりましたし」

その通りだ。

精霊達の領域に入り込んだという人間がカツラミネさんかは分からないが、可能性はある。

それだけでも俄然元気が出てくる。

他の皆も見ると、皆わたしと同じ気持ちのようだ。

そんなことを考えていると急にバンツと勢いよく部屋の扉が開かれた。

「皆っ！聞いてくれ！緊急事態だ！」

いつも間にか姿を消していたイシムネさんが息を切らしながらいう。

その表情は真剣で、いつもの気楽な感じはまったくくない。

その様子に、皆沈黙する。

その沈黙を無視してイシムネさんがとんでもないことを告げる。

「明日には戦争が始まる・・・」

予想を軽く500メートルは超えるその言葉に、理解するのにやや時間がかかった。

第三十四話 くしゃみは出そうで出ないときが1番イラツとくる

突然だった。

息を荒らし、いつもと違い真剣な表情のイシムネさんの言葉は突然だった。

戦争・・・

武力による大規模な争い。

いいことなんて何も無い、醜い争い。

その戦争が、明日には行われるという。

「せ・・・戦争って、いきなりすぎやしないか？」

ややうろたえ気味なハイドさんがいう。

「ああ、今国王に呼ばれてな、俺も聞いたときは驚いたよ、少し前に向こうの使者が来て明日の午後2時にエヴァンを攻めるとかぬかしやがった」

「わざわざ知らせに来たのか？そんなことを」

「ああ、事実だ」

「畏かも知れませんか」

エリナちゃんがいう。

もつともだ、攻撃するなら知らせずに奇襲をかければいい。

だがそれをしない・・・

畏と考えるのは当然といえる。

「まあな、だが攻撃されるのは事実、俺たちはそれをむかえ討たなくてはならない」

「大丈夫なんですか？」

「先手を取られたのは正直痛いな、こちらは今から兵に収集し事を告げ、まとめなくてはならないからな、必ず乱れが生じると思う」

「困りましたね・・・」

「ああ、だがそれをどうこう言ってる場合ではない、とにかく明日の朝にはここを出て、ここから20キロほど離れた場所で迎え撃つ」

「移動手段は？」

「大型の転移魔法でむかう、いいな？」

その言葉に皆無言でうなづく。

「よし、じゃあ俺は今から集まって会議があるからそちらに行く、皆は身体を休めておいてくれ」

その言葉にも皆無言でうなずく。
その様子に満足したのか、うんうんと首を縦に振り、そのまま部屋を出て行く。

「なあなあ、俺たちも戦うのか？」

唐突に口を開いたのはイシイさん。

「何言ってるんですか、ここで戦わなくちゃ漢というものが廃るんじゃないませんか？」

少し冗談めかしにミヤビさんが言う。
その様子には余裕が見える。
緊張とかしい人なのかな？

「はあ、やっぱりか、俺はレーナさんに会えると思って来たのに見たたんないし・・・」

がつくりとイシイさんが落ち込む。
確かに、目当ての人がいないらしく、しかも戦争に巻き込まれるなんて日には、落ち込むのも分かる。

「まあまあ将君、そう言わずに、今日はもう休みましょ？明日に備えて」

落ち込むイシイさんとそれをなだめるセイナさん。
そんなセイナさんは聖母マリアのよう。

「よし、じゃあ今日は解散だ、明日は絶対に勝とう！」

ハイドさんがビシツと決める。

その掛け声に「おおー！」と皆口をそろえて答える。

そんな中、わたしただけだろうか？今からもう若干ビクビクしているのは。

周りを見ると、どうもそんな様子の人はいない。

（やっぱり、わたし弱いなあ・・・）

争いごとが起こる度に思い出す幼少のころの記憶。

思い出したくない記憶。

忘れ去ろうとしている記憶。

この頃は思い出すこともなく、もう大丈夫だと思っていたがそうでもなかったらしい。

（わたしは・・・弱いまだな・・・）

（変わらなくちゃ・・・変わらなくちゃ・・・）

1人のエルフの女性が、そんな不安を抱えていることに気がつく者はそこにはいなかった。

第三十五話 突き出した茶碗は引つ込められない

朝が来た。

ベッドから起き上がり、カーテンを開く。

日差しは目覚めたばかりの眼にはなかなかまぶしいものだった。まぶしさに眼を薄く開いて、そのまま窓を少しあける。

涼しい風が吹き、とても心地がよい。

「ふあああ・・・」

思わずあくびが出てしまう。

元々朝は弱い方だと自信を持って言えるわたしは2度寝をしたいという衝動に駆られる。

が、その気持ちをグツと押さえ込んで睡魔を打ち倒し、完全に眼を覚ましたわたしは着替えを始める。

そのとき・・・

「おいラクア！いつまで寝ているんだ！」

パンツと勢いよく部屋の扉が開かれ、怒鳴りながらハイドさんが現れた。

ちょうどパジャマ代わりに来ていた服の上を脱いだところで。

「えっ・・・？ちよ、何？」

「お前が起きて・・・・・・・・」

部屋に思い切り入ってきたハイドさんの言葉が途切れた。
その代わりにジツと無言でこちらを睨んでくる。
何なのか全く理解できない。

「お前・・・意外と・・・」

ハイドさんがそこまで言ってやっと気づいた。
視線がある一点に注がれていることを。
そして、自分が下はパジャマ、上は下着という妙な格好をしていることを。

そんな格好を見られ、恥ずかしさがこみ上げてくる。

「きゃあああああああああ！」

恥ずかしさのあまり、無意識に叫んでしまう。
そして近くにあった小さめのイスを手に取り、思い切り投げつける。

「うげえ！」

寸分の狂いもなく、投げられたイスがハイドさんの顔面に吸い込まれていき、直撃する。

そのままハイドさんが妙な声を上げて倒れこみ、ピクリとも動かなくなった。

今までで1番最悪な朝だった。

――――

「ほんとつ最低!」

着替えを終え、ハイドさんと並んで廊下を歩いていく。

「お前が起きてこないのがいけないんだろ」

「何か言っただ？」

「いえ・・・なんでもないです・・・」

「まったく・・・」

「まあいい、そんなことより早く行くぞ!」

「どこにいくの?この変態」

「変態じゃねえ！つたくよ、もう皆向かってんだよ、戦場に」

「え、ウソでしょ？」

「いや、本当だから」

そこまできて廊下の壁にかかっている時計を見る。
すると時計は11時と37分を差している。

「何で早く言わないのよ！」

「お前が話を聞こうとしなかったからだろ！？」

いや、今すべきことは口論じゃない。
急いで転移魔法で戦場に行くことだ。

考えを切り替え、わたしは走り出す。

――――

「はあ・・・はあ・・・は・・・あ・・・」

「ああああ～～～疲れた・・・」

急いで走ってきたわたしとハイドさんは息を切らす。
朝からとんでもない疲労感が身体をめぐる。

「お？ やつと来たか、この隊が最後の転移だぞ、危なかったな」

朝からハイテンションなイシムネさんが笑いながらいう。
今から戦争なのに良く笑ってられるものだ・・・

「よし！ じゃあ行くぞ！」

マイペースに話を進めていくイシムネさんが大きな声を上げる。
それに反応して、待機していた魔術師達が呪文を唱え始める。
すると、光輝く魔法円が地面に現れる。

そして呪文を唱え終わったのか、魔法円が強く輝く。
まぶしさに思わず眼を閉じる。

次に眼を開けたときに見た光景はすごかった。
最前線には今からもうズラリと兵士並んでいた。

「戦争・・・か・・・」

ポツリとハイドさんが言葉を漏らす。
その表情にはもう余裕が感じられない。

「ええ、そうね」

とりあえず返事をしとく。

「おい、とりあえず説明しとくぞ」

そんなわたし達にお構いなくイシムネさんが地図を広げ、口を開く。

「ここがとりあえず拠点だ、ここで負傷者の治療とかをする」

地図のバツ印のついたところを指す。

今、この場所がその拠点だ。

「で、ここに魔術師の隊がいる、魔術師の存在は戦には必須だ、ここには絶対敵を近づけるな」

拠点から離れたところを指を刺す。

見ると魔術師の隊は前後左右で近接戦闘の隊が囲み守る形になっている、それほどまでに重要な存在なのだ。

「で、ここが敵の拠点だ、それでここが主な戦場になるところだな」

地図の丸印のところを指し、次に中央の大きな平地になっているところを指す。

丸印が敵の拠点、平地が戦場みたいだ。

「ハイド、お前には最前線にいてほしい、ラクアは遊撃隊と一緒に行動してくれ、そちらでまた指示が出る」

「了解だぜ」

「わかったわ」

「うむ、勝利条件は敵の全滅、および敵当主を討ち取ることだ、お前達の働きに期待している」

イシムネさんがいう。

そこにはいつものイシムネさんではなく総大将としてのイシムネさんがいた。

迫力が何だか違う。

そこまで話しをしていたとき突然ボオオオオオオオオウ・・・と鈍い音が響き渡る。

それは戦争開始の合図だった。

「始まったか！行くぞハイド！もたもたしていられん！」

「ああ！」

「ラクアも！生きて戻ろうな！」

「ええ！」

言葉を掛け合い。

それぞれが生き残るために、勝利を得るために走り出した。
何故だか、わたしの中に昨日の不安はなかった。

本当に、どうしてだろうか・・・？

第三十六話 100円ショップの存在は偉大すぎる

―― Said 石宗豪 ――

おかしい・・・

そう思ったのは最前線に向かう途中だった。

走りながら隣で一緒に走っている竜人に話しかける。

「なあハイド、おかしいと思わないか？」

「分かりきってんだろ？そんなこと、ハメられたなこりゃ」

「やはりか・・・」

「ああ、明らかに始まんのが早すぎる、おかげでこっちは隊に乱れが出てるぜ」

「ああくそっ！ムカつく！」

あっさりと罠にかかったのが悔しい。

時間通りにに攻めるなんてわざわざ予告したのはこのためか。

走りながら叱咤を吐く。

その拍子に思わず舌をかんてしまう・・・痛い・・・。

怒号が飛び交う戦場で交戦中の味方の軍の間を走りぬけ、最前線

へ足を踏み入れる。

途端、見かけは安っぽいが強度のありそうな鎧を着た者……簡単にいうと敵の兵士が剣を振り上げ切りかかってきた。それを体を逸らして避ける。

「ちよっ！危な！」

戦場なので当然の出来事であるが思わず声を漏らしてしまう。が、そのまますれ違いざまに剣を抜き、敵兵の胴体を真っ二つに切り裂く。

斬られた上半身はどこかに吹き飛び、残った下半身が血を吹き上げながら地面に倒れる。

わあゝキモい。

「うつしや！じゃんじゃん行くぜ！」

自分の言葉で自分のテンションを上げる。

はたから見たら変人だが、それを気にする者は戦場にはいない。そういえば、とハイドのことが気になり眼を凝らすとアイアンクローで敵兵の頭を握りつぶしていた、しかも兜ごと……
いやいや、それはヤバすぎねえか？

「負けてられねえぜ！」

もう一度喝を入れて自分流の戦闘モードに入る。

「『瞬影走』」

小声で小さくつぶやく。

それはチエイサー・・・追跡者という職業をやっていたときの移動技。

その速さは字のごとく、瞬く間に走る影のように早い。

グツと足に力を込め、思い切り走り出す。

追いつくものは誰もいない。

眼前に立っている敵兵を通り過ぎ様に切りつけていく。

一瞬遅れて痛々しい悲鳴が聞こえる・・・が、気にしない。

そのまま剣を振りながら突き進む。

そしてある程度言ったところで立ち止まり

「おいお前ら！ドンドン行くぞおおおおお！！」

叫び、味方の指揮をあげる。

俺は総大将なんだ、弱いところは見せられない。

俺の叫びに答えるように、味方の者が「おおおおおおお！！」と大声で返してくる。

よし、なかなか情勢立ち直ってきてるぞ。

心の中で小さくガッツポーズ。

「突撃じゃあああああ！」

「またも叫び、俺は目にも留まらぬ速さで剣を振るいながら突き進んでいくのであった。」

第三十七話 何事もマネすりゃいいってもんじゃないでしょ？

―― Side エリナ・アタランティア ―――

目前の戦場では大勢の人が武器を手に争っているのが分かる。

ここは味方軍の拠点で、その救護エリアである、ここにはそんな人たちが傷を負うと運ばれてくる。

そんな中私は負傷者に治癒の呪文を掛けたり、水を求める人に水を持ってったり、とにかく走り回っていた。

「どこか他に痛みますか？」

治癒の呪文を負傷した人に掛け、他に痛むところがないか確認する。

負傷している人はしゃべる気力がないのか、首をただ横に振るうだけ。

とりあえず大丈夫みたい。

「他に気分の悪い方などはいますか？」

出来る限りの声で呼びかける・・・が、返事はない。
負傷者が少ないのはとてもいいことだと思う。

「よっ、なかなか頑張ってるな」

ふう〜と一息ついていると、不意に声をかけられた。

身長はまあ普通くらいの人間の男の人だ。

確か名前は……忘れてしまった……

記憶力には自信があったのにちよつとショック……

とにかく魔法部隊の医療班の隊長を担う人物だったのは確かだ。

「はい、隊長様もお疲れ様です」

「なあ〜に、これくらいどおってことねえよ、まだ始まったばかりだしな」

「そうですか、忙しくなりそうですね」

「そりゃあ〜な、ところで、隊長様って呼び名はどつなのよ?」

「え?何か問題ありましたか?」

「いやいや、俺とエリナっちの仲じゃねえか、もっと親しみを込めた言い方はない?」

「すみません、変な呼び名で呼ばないでください」

いきなり何なんだろう?

勝手に変な呼び方をするし妙に馴れ馴れしい……

「そう硬いこと言うなよ、あつ！もしかして照れてる？照れちゃってます！？」

鼻息を荒くして言い寄ってくる。

ススッと迫ってきて手を取ろうとしてくるが、1歩足を引き、避ける。

「チツ・・・」と舌打ちが聞こえた気がした。

正直いい気分ではない。

「私、仕事に戻りますので、隊長様も頑張ってください」

こういうのは無視するのが1番。

とりあえず礼儀として一礼し、笑顔で答え、早足にその場を去る。後ろから「ああゝ待って！でもそんなツンなところもいいねゝ、痺れる！」何て気持ち悪い言葉が聞こえたがそれも無視！

無事に気持ち悪い隊長に手を逃れた私は負傷者がいないか、何かを必要としている人がいないか、目を凝らして歩き回る。

が、どうやら誰もいないらしい。

じゃあ少し離れても大丈夫だろう、そう思い今度は魔法部隊の援護班に向かう。

――

「こんにちは、手伝いに来ました」

援護班の隊長と見受けられる人に挨拶をする。

「あら、貴女が総大将の言ってた子かしら？」

隊長と見受けられる女性は丁寧な言葉使いで答えてくれた。

先ほどの気持ち悪い男よりも比べモノにならないほど態度が違う。何だか嬉しさがこみ上げてくる気がした。

「はい、エレナと申します、早速ですが隊長様、私は何をすればいいのですか？」

「良く出来た子ね、それじゃあ皆に混ざって支援魔法の詠唱をしてくれるかしら？」

「了解です」

援護班は支援魔法の『強化』を広範囲にわたり見方に掛けたり、生成魔法で武器を作り上げたりするのが役目。

そのためには結構な人数を必要とするため、多いことに越したことはない。

私は他の援護班の人達に混ざり、詠唱を唱え始める。

少しでもこちらが有利になるために、出来る限りのことをする。
そうすれば、きっとご主人様も褒めてくださるはず・・・

そう思つと余計にやる気が出てきた、何故だろうか？

第三十八話 モノには順序ってものがあるんじゃない？

―― Said ティネルローゼ・アルイーマ ―――

四方を目を凝らして見ると、近接戦闘の隊が守ってくれているのが分かる。

魔法を唱えるには集中力を必要とする。

ましてや大型の大魔法を唱えるとなると完全に無防備になる。

なので守ってくれるというのはとてもありがたいし、貴重な戦力を割いてくれていることに感謝しなくてはならない。

「魔法、唱え終わったよ どこに落とせばいいの？」

唱えた魔法を発動せず、一旦待機させる。

行き場を失った魔法が自分の周りをふわふわと浮いている。

「おおー流石に早いな ちょっと待て、今確認する」

大型の魔法だけあって下手な場所に落とすと味方にも被害が及ぶ。それを避けるために今、落とす場所の確認をしてもらっている。

「よし、この場所に落としてくれ」

魔法部隊の大型魔法班の隊長の男が地図を広げていう。
場所は、戦場の真ん中からやや敵軍よりの場所だ。

「まかせて、解凍——コメディーコメット！」

指定された場所に魔法を放つ。

それに遅れて空から可愛い、絵に描いたような黄色い星が降ってくる。

その大きさは約70メートルはある巨大なものだった。
そんな巨大な星が敵軍に落ちる。

ドオオオオオオオオオ——ン……

落ちたのに一瞬遅れて音が響く。

「うわ、すげえ……」

「そうでしょ、テイルはすごいんだから！」

感嘆の声を上げる隊長の男に、えっへん！と胸をそらして自慢する。

何だか鼻が高い。

「ああ、すごすぎるな、よし！じゃあ次を頼む」

「任せて」

もう一度魔法の詠唱に入ると、その瞬間――

「敵が大型の魔法を発動してきたぞ！」

どこからか声がした。

誰が言ったか分からないけど、その声に焦りが混じっているのが分かった。

「チツ！早いな、向こうにも強力な魔術師がいるのか！場所は！？」

「場所は・・・ここ！ここです！」

その言葉が聞こえた瞬間。

空を見上げると大きな火炎弾がこちらに迫っていた。

「クソ！総員、防御魔法を使え！」

隊長の男が怒鳴るような大声でいう。

「む・・・無理です！間に合いません！」

どうやら間に合わないらしい・・・

自分も詠唱を中断し、防御魔法の詠唱を始める、が、おそらく間に合わないだろう。

無詠唱の魔法もあるが、あの大きさの魔法にはおそらく効果はないので使えない。

「ちくしょう！生きて帰ったらアイツと結婚する約束なのに！」

隊長が悔しそうに、涙を流しながら言う、しかも台詞はどこをどうとっても死亡フラグな台詞。

が、そんなことはお構いなく、火炎弾はどんどん迫ってくる。

（カツラミネ様・・・私、死んじゃうんでしょうか？）

詠唱の言葉をつぶやきながらそんなことを考えてしまう。

死が迫っている割には意外と冷静に頭が回る。

自分でもビックリ。

周りを見ると、必死に逃げようとする者、泣いている者、防御魔法を唱えようとする者、色々いた。

（最後にカツラミネ様、彼方に会いたかったです）

そんな中、自分は死を受け入れることにした。

そして、迫っていた火炎弾と地面との距離はゼロになった・・・

第三十八話 モノには順序ってものがあるんじゃない？（後書き）

感想などありましたらください。 m (_ _) m

第三十九話 風呂上りの炭酸はサイコーだぜ！

—— Saidラクア・ローレンス ——

ハイドさんとイシムネさんと別れ、遊撃隊の元へと走り出す。
その途中、主戦場の真ん中あたりに巨大な絵に描いたような星が
落下した。

ドオオオオオオーン・・・

大きな音が響き渡り、大地が揺れる。

「きゃっ！な・・・何今の！？」

あまりの音の大きさに思わず声を出してしまう・・・恥ずかしい・
・
アレが何なのか気になるが、考えていても仕方がない。

「と、とにかく合流しないと」

再び走り出す。

――

走り続けていると、数人の人影が見えた。

こちらに向けて手を振っているのが見えるので、おそらく遊撃隊の人だろう。

少し走る速度を上げ、たどり着く。

「遅れてすみません」

「気にするな、では全員そろったな？ 今からは2人1組で行動すること！ いいな？」

「はいっ！」

「貴女はラクア殿、でよろしいのかな？」

「は、はい」

「君は私と一緒にだが、構わないか？」

「はい、よろしくお願いします」

「よし、では全員散れ！」

その一声で、全員が2人1組のペアを作り、別々の方向へ走り出す。

ものすごい統括力だ。

「では私たちも行こう、私はレイシア・ファーンネルという、遊撃隊の隊長をしている、よろしく頼む」

「は、はい、よろしくお願いします！」

挨拶を終えると、すぐさまレイシアさんは走り出す。
わたしはその後に続く。

そのまま数分走ったところで突然レイシアさんの足が止まった。
急に足が止まったので危うくぶつかりそうになる、危ない危ない・

・

「どうしたんですか？」

「敵だ・・・構えて・・・」

そういつてレイシアさんが腰の左右についている鞘からやや小さめの剣を抜く。

敵の姿は見えないが、わたしもそれにならって剣を抜く。
と・・・

「ありゃ、何でバレたんだ？」

木の陰からどこか聞き覚えのある声が聞こえ、1人の男が出てきた。

「てゝおお！？アンタはいつかの嬢ちゃんじゃねえか！」

「えゝと、どちら様でしたっけ？」

「ひでえゝなあゝ、マルドだよ、前に会ったろ？」

「ああゝ思い出したわ、今度は逃がさないわよ！」

「ラクア殿、こちらは知り合いか？」

「いいえ、どっちかって言うと敵です」

「む・・・承知した」

「おいおい、女の子が物騒なこと言っんじゃないやねえよ、まったくよおゝ」

「黙りな、さいっ！」

喋っているマルドに向かって距離を詰め、容赦なく剣を振るう。が、当たる直前、その姿が掻き消える。

「おっかねえゝなあゝ嬢ちゃん」

後ろから声がする。

回りながら勢いをつけ、後ろに向かって水平に斬る。

が、またも姿が掻き消える。

「遅えよ」

またも後ろから声がした。

その声にはさっきのような軽妙な感じが無い。

後ろを振り向くと、マルドがわたしに向かって剣を振り下ろしていた。

（間に合わない！）

振り下ろされた剣が当たる瞬間――

ガキイイイイイイイイ――ン

金属と金属がぶつかり合う音がした。

見るとわたしとマルドの剣の間に別の剣があった。

「大丈夫！？」

声がかかる、声の主はレイシアさんだ。

「は、はい、ありがとうございます」

「そう・・・、はぁっ!」

レイシアさんが掛け声と共にマルドの剣をはじく。

「おっと、そこのお嬢さん、邪魔するのかい？」

「黙って見過ごせるもんですか!」

「そうかい、じゃっ!手加減しないぜ!」

そういつてまたもマルドの姿が掻き消える。

「あばよ、お嬢さん!」

声が聞こえた頃にはマルドはレイシアさんの後ろにいた。マルドが剣を振り上げた剣を振り下げる。

「危ない!」と、叫ぼうとした瞬間。

レイシアさんの姿が掻き消える。

「やあっ！」

突然レイシアさんがマルドの後ろに現れ、マルドの顔めがけて剣を突き出す。

驚きの表情を浮かべながらマルドが首を曲げる、が、反応が遅れたせいか、剣が頬をかすめる。

「チツ！」

舌打ちをしながらマルドさんが飛びのき、距離をとった。

「お前もか・・・」

「ええ、私も貴方と同じ『風』の魔法が使えるの」

「マジかよ、やりにくいなあゝちくしょう!」

「それは私もよ、ラクア殿、動けるか？」

「は、はい！大丈夫です」

返事をし、わたしは剣を構える。

「2対1か・・・いいぜ、相手してやるよ」

「その余裕がいつまで持つかしらね？」

2対1となってもまだまだ余裕の表情をしているマルドに、レイシアさんは走り出す。

その速度はとてつもなく速い。

わたしも遅れを取らぬ様に駆け出すのであった。

第四十話 プリンもいいけどゼリーも捨てがたい

―― Saidハイド・ブライン ―――

耳にガンガンと響く金属音に思わず顔をしかめてしまう。
こりゃゝ明日は頭痛だなゝゝとひそかに思う。

いや待てこれは戦争なんだ、1日で終わるわけがないんだ、明日
休めないかなゝゝゝ

剣で切りかかってくる敵兵を出端崩しで殴りかかり、吹き飛ばす。
ああゝゝゝ爽快だぜ！

ハイドの武器は剣ではなく自分の拳、戦場では無謀と思われるが、
ハイドからしてみれば剣で戦う方がやりにくい。
結果、拳で戦うことにした。

「うりゃあああ！」

槍を持った敵兵が叫びながら突進してくる。
それを身体をそらして避け、同時にラリアットを相手の顔面めが
けて放つ。

「うげえ！」と変な声を上げながら敵兵が倒れこむ。

「ぬるいぞ貴様らあああ！」

一瞬で『半竜化』を終え、大声をあげる。
それに怯み、周囲の敵兵の動きが一瞬止まる。

「オラオラオラオらあああああああ！！」

そんな敵兵にお構いなく、背中の翼で微調整をしながら低空飛行する。

それに加えて回転しながらなぎ払うように脚を繰り出す。
いわゆる竜巻○風脚だ。

「はっはっは！竜人なめんなゴラァ！」

足に蹴った感触が次々に伝わってくる。

が、いきなりその感触と勢いが失われた。
そしていきなり視界がすごい勢いで動き出す。

気がつくやうに投げ飛ばされていた。

「！？」

何が起きた！？

翼を大きく羽ばたき体勢を立て直し、そのまま滞空する。

そして下を見る。

「おい、この俺様を投げたのはお前か？」

そこには他の兵士とは明らかに雰囲気の違い若い男が立っていた。その男に確認の言葉を投げかける。

「・・・・・・・・」

が、返事はない。

すると味方軍がその男に次々と切りかかっていった。一瞬ここが戦場だと忘れてたぜ。

切りかかっていく兵士達を見て、男はニヤリと笑う。

その笑みを見て、ゾクツと身体が震えた。

ヤバイ・・・と本能が告げている。

男に切りかかっていく兵士を止めようと口を開こうとした瞬間――

味方の兵士が黒い『何か』に飲み込まれた

「!？」

そして黒い『何か』が、音もなく消える、と、そこには首と胴体の分かれたボロボロの兵士達が倒れていた。

倒れている兵士を見て、男の笑みがより深まる。

何が起きた・・・？

「おい、その竜人、ここは戦場だぜ？戦わないのか？」

戸惑う俺に突然声をかけてきた。

「・・・・・・・・」

言葉が出ない・・・

身体が動かない・・・

何かに縛られているような感じがする。

「無視かよ、つまんねえな」

つまんなそうに男がつぶやく。

「もういいや、死んで」

男がこちらに手の平を向ける。

ヤバイ!!

直感的にそう感じ、自分でも驚くくらいの速さで撤退する。

ちらり、と後ろを見ると男との距離がどんどん広がっていくのが分かった。

途端、左肩のあたりに激痛が走った。

「マジかよ……………」

見ると、肩の付け根の部分から何もなかった。

とても信じられなかった……が、その痛みが現実だと思い知らせてくる。

「クソっ……！何なんだアイツは！」

言葉を吐き捨て、追ってこないのを確認し、痛みに顔をしかめながらとにかく拠点に戻ることにした。

第四十一話 コロッケは揚げたてが1番 これ常識

―― Said ティネルローゼ・アルイーマ ―――

死を受け入れ、ギュッと目をつぶる。

正面からは熱気が襲い掛かって来る。

そして、巨大な火炎弾と、地面との距離がゼロになる。

と、思われた・・・

目をつぶっているので分からないが、熱気は感じるが痛みが全くない。

疑問を浮かべながらも、恐る恐る目を開ける。

「！！」

目の前の光景が信じられなかった。

どこから来たのか、目の前に朱色の翼を生やした朱色の髪の女性が立っていたのだ。

が、それだけじゃない。

その女性は迫っていた火炎弾に向けて手をかざしている。

火炎弾というと、その手に吸い寄せられるように吸収されていく。

「え？何が起きたの？」

思わず言葉がこぼれる。

が、それに答えるものはいない。

数秒後、巨大だった火炎弾は目に見える速さで小さくなっていき、最後にはその姿が完全に消えた。

「どうだった？久しぶりの炎の味は」

「一言で言う和不味いですね、たとえるならポン酢と焼肉のタレで炊いた米で食べたカレーの味です」

いきなり後ろから声が聞こえた。

その声には聞き覚えがある、もう聞けないと思っていた声だ。その声に翼を生やした女性が答える。

後ろを振り返る。

そこには自分の求めていた姿があった。

「カツラミネ・・・様？」

「はいはい、みんな大好き桂峰でええす」

状況が状況で半ば信じられず、尋ねてしまう。そんな言葉にノリノリで返事をしてくる。

確信した。

この軽妙で洒脱な感じは間違いなく自分の主たる者、桂峰だと。その事実の嬉しさに、涙がこぼれる。

「ああ・・・あれ？どうしたの？どこか痛い？」

「い・・・いえ、違うんです、嬉しいんです」

「んん・・・よく分からないけど、嬉し泣きならいいや、存分に泣くべきだね」

「はい、では・・・泣きます」

———
「周りがどうなったいるのか？とか。

そんなことも構わず桂峰の鳩尾の辺りに顔を押し付け、泣いた。

とにかく泣いた。

「そろそろ落ち着いたかい？」

「はい、突然申し訳ありませんでした」

「いや、気にしないでいいよ」

手をひらひらと振りながらいう。
そんな何気ない仕草も新鮮だ。
思わず見とれてしまう。

ポケ〜と見とれていること数分、エリナお姉ちゃんがやってきた。

「ここに大型の魔法が撃たれたと聞いて来たんですが・・・って！
カ、カツラミネ様！？」

「みんなリアクションが新鮮だね、おもしろいや」

「いや、ど・・・どうしてこんなところにいるんですか！？」

「さあ？どうしてだろ？」

エリナお姉ちゃんが言葉を失う。

うん、このよく分からない感じもカツラミネ様のモノだ。
心の中でうんうんとうなずく。

「・・・まあいいです、後でちゃんと詳しい話を聞かせてください
ね？」

「ええ〜めんどくさあ〜・・・」

「いいですか？カツラミネ様？」

「はいはい、わかったよ」

どこことなくプレッシャーを感じるエリナお姉ちゃんに観念したのか、両手を挙げていう。

「それで、カツラミネ様こちらの方はいったい・・・」

エリナが翼の生えた女性のことと尋ねる。
実は私も気になっちゃってました。

「ああ、こちらは今人の形をとってるけど、ぼくの使える精霊の1人？の『朱雀』のええと・・・」

「マイケル・朱ジャクソンです」

「「本当ですか！？」」

「ウソです、私のことは『ニコニコの母』ともお呼びください」

「何ですかそれ・・・それもウソですよね？」

「もちろんです、私のことはシュミルと呼んでください」

「分かりました」

「そうそう、みんなを助けたのも彼女だから、感謝しなきゃね」

カツラミネ様がいう。

どうやらこの人？に助けられたみたい。

「ありがとうね、シュミルお姉ちゃん」

「っ！！」

「どうかした？」

「主・・・この子私の妹にしているんですか？」

「いやいや、ダメでしょ」

「だって見てくださいよ！こんなにかわいいんですよ！？」

急にシュミルお姉ちゃんのテンションが上がりだす。
カツラミネ様も苦笑いしている。

と、そんな時。

何かが空から落ちてきた。

「
いってえ・・・」

見るとその『何か』はハイドさんだった。

「あ、こんにちはツス旦那、戻ってたんですね」

地面に激突したときの体勢のままハイドさんがいう。
そんなハイドさんを見てみると左肩の付け根の部分が何もなく、
血が流れている。

「ハっハイドさん！どうしたんですかその傷！？」

エリナお姉ちゃんが驚きの声を上げる。

「かなり奇妙なヤツがいたんだ、そいつにやられた・・・」

額に脂汗を浮かべながらいう。
とても苦しそうだ。

「とにかくもう動かないでください、今治療しますから！」

「ああ、すまねえな」

「うん、治療もいいけどここから離れた方がいいよ」

エリナお姉ちゃんが治癒の魔法を唱えようとしたとき、不意に力ツラミネ様が口を開いた。

その瞬間――

遠くから叫び声が聞こえた。

何事かと思い、目を凝らしてみると1人の男の人が歩いてこちらに向かってくる。

笑いながら……………

「来た！アイツだ！」

横たわりながらハイドさんがいう。

その表情が、むこうがただ者じゃないというのがよく分かった。

「ほら、早く離れた方がいいよ」

そんな中、めんどくさそうにカツラミネ様言う。

エリナお姉ちゃんが何かを理解したらしく、無言でうなずき、ハイドさんに肩を貸し、歩いていく。

私も何となく悪い予感がし、一緒に歩き出す。

「カツラミネ様・・・」

「ん？」

「死なないでください」

「ははは、大丈夫だよ、ぼくには女神様がついてるから」

カツラミネ様が自慢げに言う。

そんなカツラミネ様を見ると不思議にも本当に大丈夫な気がした・・・

第四十二話 みかんとコタツは切っても切れない関係にある

静寂・・・

戦場だというのにもかかわらず、この場だけは静かだった。

周りにいた者は皆どこかに非難し、この場にいるのは桂峰とその使いの人型をとった朱雀、それと向かい側から歩いてくる1人の男だけ。

「そつえばさ、君のことは本当は何て呼べばいいのかな？」

桂峰が徐に口を開く。

「あら？バレてました？」

「まあね、小さい子にウソを吹き込むのはちょっとどうかと思って」

「思いつきにしては中中いい名前だと思ったんですが」

「でさ、何ていうんだっけ？」

「寂しいですね・・・昔は朱っちゃんって可愛い名前と呼んでくれていたのに・・・」

そつと涙を隠すように言う。

その動作に一瞬何かをそられた気がしたが、多分気のせいだろう。

「まあ、何でも言いか、名前なんて」

「何でもいいんですか・・・ショック！」

「はいはい、それよりあの人がどこかで見たことない？」

桂峰は軽く流し、歩いてくる男のことについて問いかける。

「むむうゝ・・・」

頭を抱え、思い出そうとする使い。

「あつ！思い出しましたよ、2丁目の後藤さんじゃないですか？」

「後藤さん？」

「ええ、家族が安心して外へ行けるように身を挺して帰るべき場所を気まぐれで守る、その代わり己の要塞と化して寄生虫の様にいつまでも居座っているともつぱら噂の」

「ただの引きこもりじゃん」

「またの名を自宅警備員です」

「誰が自宅警備員だ！！誰が！」

2人の会話に、いつの間にか結構な至近距離に接近していた男がツツコンできた。

割りとノリのいいヤツなのかもしれない。

「おい、何でアンタがここにいる？」

「え？ぼく？」

「そうだ、死んだんじゃないのかよ？」

「とつぷしーくれつと！」

「・・・チツ、朝見の野郎、しくじったのかよ」

ものすごく不機嫌そうな顔をし、言葉を吐き捨てる。

「まあいい、俺が殺す」

男が手をこちらに向けて手をかざす。

瞬間、どこからともなく黒い何かが現れ、地を這いずるようにこちらに迫ってくる。

「うわ、何あれ？」

「何か分かりませんが危険なことには変わりないと思いますよ？」

マイペースな勢いで言葉を交し合う。

それが攻撃をされている時でも。

そんなことには構わず、黒い何かはどんどんその距離を縮めていく。

「むこうはやる気満々だね、こちらも戦いましょうか」

「いやです」

「え？何で？」

「名前・・・」

「はい？」

「名前で呼んでくれなきゃやりません」

「ええーめんどく、さっ！」

言葉を返しながら黒い何かを避けるべく2人が大きく後ろに跳ぶ。男は畳み掛けるように不規則な形の黒い何かを連続で放つ。

「ねえ戦ってくれないの？」

「名前で呼んでくれなきゃいやです」

「ああ、名前忘れちゃったんだけど・・・」

攻撃をかわしながらいう。

「じゃあ、昔みたいに朱っちゃんって呼んでください」

「ええくと、朱っちゃん？」

「もう1回」

「朱っちゃん」

「もう1回」

「朱っちゃん」

「もう1回」

「しゅ・・・いや、もういいでしょ？」

「ちえっ、仕方ないですね」

悔しそうに、だがどこか嬉しそうに言う。
その表情は嬉しそうに笑ってる。

「ムカつく、目の前でイチャつきやがって」

元从不機嫌そうな顔がより一層深まる。
そして、今度は地面に手をつく。
途端、地面から黒い何かを形どっていく。

そして1匹の黒い竜が出来上がる。

「ゴオアアアアア！」

黒い竜が大きな咆哮をあげる。
耳痛いわ・・・

「朱っちゃん、何か来たよ」

「ふふ、さりげなく呼んでくれるあたり、グッと来ます！」

「分かったから、で〜アレ任せてもいい？」

「もちろんです」

「じゃ、よろしくね」

黒い竜のことは使いの朱雀に任せ、桂峰は男と戦うため、そちらに走っていく。

第四十三話 じゃぱにーずさむらいVS影使い

男と距離をつめるべく走りながら、暗器術により隠していた刀をどこからともなく振り抜く。

対して男は黒い何かで真っ黒な剣を作り出し、こちらにむけて振りかぶる。

「ていつ！」

「はっ！」

ガキイイイイーン……

同時に切りかかり、刃がぶつかり合い火花を散らす。
耳かキーンとする。

「へえ、それ便利だね」

「アンタの能力だつてチートじみてるだろ」

刀と剣で鬨ぎ合いながらいう。

「そんなことないよ、色々と試してるうちに身についただけさ」

「それがチートじみてるつつつてんだよ！」

不機嫌さが混じった声で言い放ち、刀にかかっていた重さが増す。力の流れに逆らわないように、押された勢いを乗つけて桂峰が大きく後退する。

それに追撃するべく、男が黒い何かを直線状に数弾放つ。それら全てを刀で逸らす。

「なるほどね」『影使い』か」

「ほう、よく分かった、なっ！」

話しながら影使いが、今度は大きな大剣を作り出し、飛ばす。大きな大剣が結構な速さで飛んでくる。それを身体を逸らして避ける。真横をものすごい質量が通り過ぎていく。

「危ない危ない、そっちがその気ならばくもいくよ」

桂峰が光り輝く羅針盤をどこからともなく出す。

「座標効果……『おまかせ』！」

うきうきとした声で桂峰がいう。
その声は無邪気な子供のようだ。
するとその声に反応して、羅針盤の光が増し、その針がぐるぐる
と回りだす。

ピタリ。

針が北の方角をさして止まる。

と、同時に桂峰を中心に陣が展開される。

「わお！ラッキー！」

嬉しそうな声を上げる桂峰。

「チッ！めんどつくせえ！さっさと死ねよ！」

影使いが大声を上げ、手を振りかざす。
が・・・

「っ！？」

何も出てこない。

「おい、何しやがった」

「座標効果の変換でね、『技能無力化』が出たんだ、かなり運がいいよ」

「っ！・・・この鬼畜チート野郎が！」

「何とでもいいなよ」

焦りの表情浮かべる影使いに桂峰は歩み寄り、無造作に距離を詰めていく。

「さてー」

ある程度距離をつめたところで桂峰が体術の構えをとる。
よく分からない構えだけど。
そして口を開く。

「漢なら、拳でやろつよ」

怠け者に相応しくない一言だった。

第四十四話 最近のバーチャル世代の子供は先を行きすぎてゐる気がするのは気の

能力が使えなくなり、素手と素手で殴りあう。
しかし、能力に頼りきりだった影使いと桂峰では力の差は歴然だった。

「せいっ！」

「ぐあっ・・・！」

距離をつめ、手刀を影使いの鳩尾に打ち込む。
苦しそうな声が耳に届いた。

が、攻撃を受けても食いつくように影使いが殴りかかってくる。
大振りの素人同然のパンチだ。

それを手の甲で軽くはじき、逸らす。
それに続く動作で空いた手で隙だらけの顎に拳を打ち込む。
ごっ！

と、鈍い音がし、影使いの男の身体が一瞬中に浮く。
続けざまに身体を回し、回し蹴りを放つ。
影使いの男が吹き飛ぶ。

「う・・・ぐっ！」

「ん？意外と丈夫だね、鍛えてるの？」

膝を地につき手で支えるような体勢の影使いにいう。
キツと睨み返された。
おおー怖い怖い。

「このチート野郎が！」

影使いが腕を振り上げる。
どうやら能力を使おうとするらしい。

「能力は使えない、よっ！」

地を蹴り、一気に距離をつめる。
が、予想外なことが起きた。

影使いの男の手に黒い影が集まっている。

「え？何で・・・？」

「死ねよコラあ！」

影使いの男が影を直線状に飛ばしてくる。
単発で影弾が迫ってくる。

不意をつかれたとしても、このくらいなら避けられる。

距離をつめようとしていなければ・・・

「うわっ！ヤバっ！」

勢いが止まらず、結果、自ら突っ込むことになった。

「ハッ！どうだ！」

影使いが笑みをうかべる。

ゾツとするような嫌悪しかない笑みだ。

桂峰は影に飲み込まれ、そのまま流されるように吹き飛ぶ。

「あべしっ！」

桂峰が地面に叩きつけられ、腑抜けた声が聞こえた。

「うう・・・いてて、こりゃ効いたわ・・・」

声はどこか気が抜けているが、額には脂汗が浮いている。

身体の所々が痛む。

突然能力が使えるようになったことが分からず、とりあえず羅針盤に目を向ける。

するとその針は今度は東をさしている。

「そういうことね・・・」

恐らく針が北、東、南、西、をさすたびに座標によるの効果が変わるのだろう。

座標効果を確認する。

効果は・・・『不運』って、ははっ、確かについてないな。

「今度こそ殺してやるよ」

影使いが大きな槍を作り出す。

刺々しく、刺さると痛そうなモデルの槍だ。

「あばよ」

槍が勢いよく放たれる。

空を切り、槍が迫ってくる。

「・・・シヨウ、防げる？」

「当たり前だろ？かみにゃん」

桂峰がいつの間にか後ろに立っている男に声をかける。
それに答え、男の手の中で何かが碎ける。
すると男の手が淡く光り、その手を地面につく。

途端、地面から分厚い土の壁が現れる。
槍は土の壁に当たり、壁と共に形が崩れる。

「っ!？」

影使いの顔に驚きの表情がうかぶ。
はい、だゝいせゝいこおゝう！

「何でお前がここにいる、伊志井 将！」

「お前達がいるからな、当然だろ？西寺君」

「チッ・・・相変わらずム力つくぜ」

憎悪しかない表情で睨みつけながら言葉を吐き捨てる影使い・・・
西寺 薫。

「かみにゃん、立てるか？」

「手をかしてくれるとありがたいな」

「・・・ホラ」

「いゝつもすまないねえ」

「それは言わない約束だろ？」

軽いジョークをいいながら桂峰は立ち上がる。
その姿は所々服が破けていたり、ボロボロだ。

「かみにゃん、戦えるのか？」

「はっはっはっ、大丈夫だよ、英語で言うとのーぷろぶれむ！」

「よし、じゃあやるか」

「うむ」

「いいぜいいぜいいぜ！まとめて殺してやるよ！」

第2ラウンドの始まりだった。

第四十五話 間違えて女性専用車両に乗ったときの気まずさはかなりパネエ

影使いの男、西寺が怒号の声と共に両手を振りかざす。

すると何もない空にいくつもの影が集まり、短剣を形どつていく。その数は2、4、8、と倍倍ゲームのように数をどんどん増やしていき、その数はパツと見ただけでも300は超えている。

「ちよっ！さすがにあればヤバくね？」

伊志井が驚きの声を上げる。

まあそれもそうだろう、数が数だし。

「じゃ、任せたよ」

そんな伊志井にお構いなく桂峰は刀をどこからともなく振りぬき駆け出す。

伊志井は苦虫を噛み潰したような顔をする。

それでも腰に下げたポーチから小さめの結晶を取り出すあたり、いいヤツだなと思う。

「串刺しにしてやんよ」

西寺が手を振る。

すると、その動作に一瞬遅れて幾千もの影の短剣が桂峰に降り注ぐ。

「シヨウ！大丈夫？」

「ああ！任せろ！」

影の短剣が桂峰に当たる瞬間。
次々と短剣が何かに弾かれる。
鍊金による空気操作だ。

「ははっ、さすが」

「おうよ！まだまだいけるぜ！」

余裕の笑みで答える伊志井。
どうやらポーチにはまだまだ結晶があるらしい。

「調子に乗るなあああ！」

西寺が腕を横なぎに払う。
すると曲を描くように地面を削りながら影が迫ってくる。

「とおうつ!!」

情けない声と共に飛び上がり、避ける。

「悠久蒼穹流――桜霞参ノ太刀」

静かにつぶやき空中で抜刀。

刹那――

いくつもの不可視の斬撃が西寺目掛けて放たれる。

「チツ!死に損ないが!」

西寺が対抗するように影を放つ。

いくつかがぶつかり合い相殺しあう。

が、不可視なせいで狙えなかったのか、斬撃が影を抜ける。

「ぐうあぁっ!」

胸の辺りに斬撃が当たり、血しぶきを舞う。

西寺の表情が歪む、その表情はとても痛々しい。

「さて――終わりだよ」

着地し、縮地法で距離をつめる。
が・・・

「かみにゃん下がれ！」

後ろから声が聞こえた。

伊志井の声だ。

その声に反応し、どうにか飛びのく。

勢いが殺し切れていないため、体制が崩れ、着地に失敗しかける。

瞬間、桂峰のいた場所に何かが落ちてきたのだった。

勢いよく落下し、反動で土煙が立ち上る。

そこには薄っすらと人影が見えた。

誰だろうか？

第四十六話 実はぼく、猫舌なんだ・・・

土煙が風により晴れ、1人の男が姿を現した。

「・・・朝見」

駆け寄ってきた伊志井が口を開く。
朝見と呼ばれた男が伊志井の声に反応し、こちらを振り向く。
すると、その表情に驚きが表れた。

「か・・・桂峰・・・何でお前が・・・」

ワケが分からない、といった様子でつぶやく。
その声は若干震えている。

「チツ、朝見か、おい何でアイツが生きてんだよ！殺したんじゃないかねのかよ！」

「分からない・・・俺は確かに殺したはずだぞ・・・？」

「まあまあ、そう驚かないでよ」

その場に合わぬのんきな声で桂峰がいう。

「まあいい、おいお前も一緒に戦え！絶ってえ殺してやる！」

「あ・・・ああ、分かった」

西寺の声に、戸惑いながらも答え大きな大剣を構える。
漆黒の刀身が黒光りしている。

『ソウルⅡブレイカー』という特殊な剣だ。

「シヨウ、行くよ」

「ああ！任せとけ！」

同時に伊志井と西寺が飛び出す。

西寺は影で生成した真つ黒な剣を持っているが、伊志井は無手だ。
まあきつと大丈夫でしょ？

それより今は目の前の相手に集中。

「やあ、久しぶりだね、朝見君」

「桂峰・・・何で生きてんだよ・・・」

憎しみのこもった声でいう。
声が低くて威圧感がある。

「ぼくにはね、女神様がついてるんだよ、これ何回言えばいいんだろ？」

「ふざけやがつて、お前さえ・・・お前さえいなければ・・・」

「ん？ぼく何かしたっけ？」

「！！？」

「え？何？」

身に覚えがなく、尋ねてみた。
すると、肩を落とし朝見が脱力する。
その肩が小刻み震えているのが分かった。
どうしたのかな？

「ふっ・・・ははっ！ははははははははっ！」

突然笑い出した。
ちよつと引く・・・

「お、おゝい・・・もしもゝし」

「そうか、俺を馬鹿にしてそんなに楽しいのか・・・」

「いや、別にそんなことないと思うけど」

「いいさ、もう一回殺してやる、それで丸く収まるんだ」

桂峰の声には聞く耳持たず。

虚ろな感じでぶつぶつと何かつぶやいている。

そう思ったのもつかの間、大剣を引きずるように持ちながら突進してくる。

朝見の周囲には何かどす黒いもやもやが漂っている。

武器が大剣だけに普通なら大したスピードでは移動できないと思っていたが、そのスピードは予想を1周りも2周りも超える速さだった。

恐らく、あのどす黒いもやもやが関係しているに違いない。

「せああああっ！」

掛け声と共に大剣が振り落とされる。

身体を逸らしてかわすが、真横をどす黒いもやもやをまとった大剣が通り過ぎ、冷や汗が出る。

おおゝこわっ！

朝見はそのまま流れるような動作で何度も大剣を振るう。

その全てを最小限の動きで避け続ける。

「ねえねえ、本当に何かしたっけ？」

「今さら何言ってやがる！白々しい！」

攻撃を避けながらも口を開く。

どうしても自分が何をしたのか思い出せない。

「いやいや、ホントなんだよ、よければ話してくれないかな？」

「何言ってやがる！お前が……！お前が……！」

攻撃しながらも発せられるその言葉には怒りの他に悲しみも混じっているように聞こえた。

耳元でビュンビュンと唸る風で聞き取りにくい声に、集中して耳をかたける。

「お前が……！お前が……！」

「お前が？」

「お前が俺から雪咲さんを奪ったんだろ……！」

「……は？」

一瞬何を言ったのか分からなかった。

『お前が俺から雪咲さんを奪ったんだろ!!』・・・って聞こえた気がしたんだけど・・・
気のせいだよね？

「ごめん・・・もう一度」

「お前が俺から雪咲さんを奪ったんだろ!!」

気のせいじゃありませんでしたあああああああ！

「ちよっ！それどういうこと!？」

「そのまんまだ！お前が雪咲さんを奪ったんだろっが！絶ってえ許さねえっ！」

ちよっ・・・意味わかんないんですけど・・・
てか、よく見ると朝見君泣いてるんですけど・・・

怒りが増したのか、迫ってくる大剣の速さが増した。
とにかく一旦考えをまとめるため、攻撃を避け、大きく後退する。

「あのゝ話がまったく分からないんだけど・・・」

「何言ってやがる！お前は雪咲さんと付き合ってるんだろ！」

「いや・・・付き合ってないよ・・・?」

「は?」

「いやいや、ホントホント」

「う・・・ウソだ!騙されないぞ!そんなハズはない!」

「悲しいねえ・・・信じてもらえないなんて・・・」

「えっ・・・と・・・マジで?」

「マジです」

その一言で納得したのか。

怒りに塗れた表情から一変してパアツと明るくなった。

どうやら誤解だと分かってくれたらしい。

と・・・思いきや、いきなりその表情が曇った。

「ま、待つんだ俺・・・信じていいのか?・・・いや、ダメだろ?・・・いやいやもしかしてホントに」

ぶつぶつとつぶやき始めた。

一言で言えば変人だ。

「おゝい、朝見君?」

「よしっ！決めた！」

「・・・何を？」

「確認してくる！」

そう言つて大剣を肩に担ぎ、走り出す。

「西寺あ！俺ちよつと用事思い出したわ！」

「はあっ！？テメーふざけんなよぽおう！？」

朝見に向けて怒鳴る西寺。

が、よそ見たせいで伊志井のパンチを顔面にモロにくらい、変な声を上げて吹き飛ぶ。

朝見はそんな西寺に目もくれず、そのまま疾風のごとく走り去つていった。

「朝見の野郎・・・後で絶つてえ殺す・・・」

西寺が起き上がり、口元の血を拭いながらつぶやく。
その声はひどく荒んだ声だった。

第四十七話 そろそろキツくなってきました

―― Said ラクア・ローレンス ―――

すでに太陽は沈み、空には月が顔を出している。

戦の音はすでに聞こえない。

遠く離れてしまったせいなのか、それとも夜になり軍が一旦引き返したのかは分からない。

それでもこの場では今もなお、戦いが続いている。

レイシアさんとマルドの戦いはすさまじく、どうにかついていくのが精一杯だ。

目でどうにか捉えられるかどうかの速さで2人は駆け回り、剣を打ち合っている。

始まってからどのくらい経ったのだろうか？

「はあっ！」

「そらっ！」

暗闇から声が聞こえ、火花が散る。

一瞬、2人の顔がハッキリと見えた。

レイシアさんのその表情には疲れが目に見えて見えた。

「レイシアさん！大丈夫ですか！？」

暗闇に向かって呼びかける。

「ええ・・・大丈夫よ」

「ほほぅまだいけるのか、意外とやるなお嬢さん」

疲れ気味のレイシアさんに比べ、マルドの声は余裕があった。

「黙りなさい！やあっ！」

再び暗闇で動き出す。

剣と剣の打ち合う音が響く。

とにかくわたしも何かしないと・・・

「レイシアさん！わたしにも何か手伝えることはありませんか！？」

「魔法で援護できる！？とにかく攻めるわよ！」

「分かりました！」

よし、こうなったら無詠唱じゃなく詠唱ありの中級の魔法でいこ

う。

わたしだってやれば出来る子なんだから！

「させないぜえ」

詠唱を唱え始めたところ、後ろから声が聞こえた。
速い・・・！

「嬢ちゃんはおとなしくしてな」

空を切りながら剣が迫ってくるのが分かった。
が。

「そんなこと、私がさせないわ！」

ガキインー！

背中で剣と剣がぶつかる音がする。

正直心臓に悪い・・・

そんな中、詠唱を唱え終わる。

「レイシアさん下がって！いてつく氷塊よ、敵を飲み込め！——
ブリザードウェーブ！」

後ろを向き、唱える。

唱えた直後、渦を巻くように氷が集まりその大きさを広げていく。
レイシアさんは大きく跳躍し、すでに非難ずみだ。
マルドの身体が氷の渦に飲み込まれていく。

「うおっ！？なんじゃこりゃ！」

驚きの声が聞こえる。

これは効いたのかしら？

「ラクア殿、助かった・・・」

「いえ、わたしの方こそ助けられてばかりでしたので」

ホッと一息つく。

瞬間――

「おいおい、一息つくには早くねえか？」

「！――」

マルドの声が聞こえた。

振り返るとレイシアさんの背中に剣を突き立てている。

「そんな・・・アレをくらっても動けるの!？」

「まあな、そんなに柔く鍛えた覚えはないしな」

「・・・・・・・・」

どうする？

レイシアさんが人質に取られ、わたしじゃマルドにはかなわない。
万時休すか・・・

「ほう、いい判断だ、動かなければ殺しはしないでやるよ、楽しかったからな」

「・・・貴方はどうしてこんなところにいるの？何が目的？」

「ふうむ・・・まあぶっちゃけると仕事だな。今は雇われの身だ、それにな、こちらら必死なんだよ」

「どういふことかしら？」

「娘が・・・娘が今病にかかったんだよ！それも治る望みも薄い病にな!」

「あなた娘さんがいたの!？」

「おうよ、今年で7歳のかわいい娘だぞお」

「へ、へえ」

「なのに病にかかっちゃまうなんて、かわいそうだろ!？」

「え、ええ」

「もう終わりだと思ったんだがな、依頼主がどんな病でも治せるといふ、だから俺はどんなことをしても必ず娘を助けるんだ!」

敵ながら思わず感動してしまった。

何？マルドゥって実はすごくいいヤツなのかしら？

「そついうわけだ、今回は見逃してやるからここは退いとけ」

急にまじめな口調でいう。

その声にはどうにもいえない威圧感がある。

「・・・わかった、今回は負けを認めよう」

口を開いたのはレイシアさんだ。

武器を捨て、両手を挙げて降参を示している。

「話分かるヤツは嫌いじゃねえぜ、もっと強くなったらまた相手

「してやるよ」

剣を下げ、マルドが距離をとる。
そのまま背を向け、去ろうとする。

「待って！」

「ああ〜？」

「貴方の依頼された内容は何なの？」

「………そうだな、一言でいえば人殺しだな」

「……誰を殺すの？」

「そんなこと、嬢ちゃんには関係ないだろ」

そう吐き捨て、その姿が消えた。
どうやら行ったらしい。

緊張の糸が切れ、今度こそふう〜と、一息つく。
それはレイシアさんも同じだったらしく、ふにゅ〜と可愛い
声が聞こえた。

助かったんだな……と、心から思った。
が、よく分からない、何か嫌な予感がずっと消えなかった。

第四十八話 流れに身を任せると時に危険な目に合う

―― Said 石宗豪 ――

夜になり、味方の軍も敵の軍も一旦引いている。
静かな広い荒野にただ1人、立ち尽くしている。

「・・・シャイン」

短く、魔法を唱える。

すると真上に輝く光球が現れる。

月明かりしかないこの場では調度いい明るさで輝き続ける。

「・・・・・・」

無言のまま、とにかく待ち続ける。

すると、声がかかった。

「ずいぶん早いね」

その声はきれいなソプラノボイスでどこか幼さの混じった女性の声だった。

「やっぱりお前か・・・」

「あら？久しぶりに会ったっていうのに嫌そうな顔しないでよー！兄さん」

クスクスと笑いながらいう。

その様子はとても可愛らしい。

それは石宗豪の妹・・・石宗叶だった。

「そんなことはいい、何のようだ？」

「ふふ、せっかちな男はモテないわよ？巡夜さんもそんなんじゃ振り向いてくれないと思うな」

「う、うるさい！関係ないだろ！」

整然を装うと思っていたが、無理だった・・・

相変わらずコイツは気にしていることをズバズバといってくる。

どうせそうだよ・・・俺は3年も星奈さんに様々なアプローチを掛けてきたが、未だに何の反応も示してくれていない。

もはや眼中にないのかと思ってしまいうくらいだ、トホホ・・・

「まあいいわ、単刀直入に言うけどこちら側に来ない？」

「断ると何度も言っているだろ？逆にお前がこちらに來い」

「それこそ何度も聞いたわ、嫌よ」

「・・・なら、力ずくでも言っことを聞いてもらおうか」

「いやん、兄さんって実は結構Sなのね、衝撃の新事実！」

「バカっ！ちげえよ！」

「ふふふ、冗談よ、まあでもそういう兄さんも私嫌いじゃないわよ」

「言っとけ！」

声と同時にお互い地面を蹴る。

すれ違いざまに剣を振りぬぎ、腕を狙いに斬りつける。

が、やはり現実には甘くない。

振り抜いた剣はまるでくるのが分かっていたかのように、あっさり
りと叶の逆手に持った小刀の刀身で防がれた。

キンーーーと高い音が耳をうつ。

「っ！『瞬影走』」

攻撃に失敗し、地に足をついた直後に小さくつぶやく。
反動を利用して思い切り地を蹴り、高速で叶を攻める。

「ふふ、移動術を兄さんしか使えないと思ったたら大間違いよ、『瞬影走』……」

「!!」

叶のキレイな声が聞こえ、瞬きした瞬間、叶のその整った顔が眼前に迫っていた。

そして逆手に持った小刀で斬りつけてくる。

恐らく狙いは胸……

とっさにそう判断し、攻撃しようとしていた剣の起動を変え、刀身を胸に当てどうにか防ぐ。

金属と金属のぶつかる音がする。

が、それで終わらない。

今度はどこに隠し持っていたのか？　もう片方の手に持っていた小刀で突いてくる。

「くっ！」

身体を大きく逸らし、その攻撃をギリギリかわす。

そのまま空いた手で叶の鳩尾めがけて拳を叩き込もうと考える。

瞬間――

眼前に、叶のほっそりとした足が曲げられて、その膝が迫っていた。

読まれてんのか!?

どうやら鼻血が出ているらしい。

「バカっ！コレはちげえよ！誰がお前なんかに欲情するか！」

「ふふふ、顔を真っ赤にしちゃって、兄さん意外とかわいいね」

「うるせえ！」

ちくしょう・・・叶のペースに乗せられ気味だ。
どうにかしないと・・・

石宗の色々必死な戦いが始まったのであった。

「はっはっは！ぶち殺してやるよ！」

何故かいきなりテンションが高くなった西寺が手を上にかざす。途端、今までの倍近くの大きさの影の大剣を数十本も生成した。

「おいおい、マジかよ・・・」

伊志井の頬を、汗が流れる。

アニメや漫画でもよくある焦ったときのお約束だ。

西寺が手を振るう。

その動作に一瞬遅れて無数の影の大剣が、2人にめがけて降り注ぐ。

「ちよっ！アレはさすがに防げないぞ！」

「むむ・・・」

伊志井が両手で結晶を砕く。

だが、恐らくそれじゃ足りないだろう・・・
コレって結構ピンチ？

そう思った瞬間。

影の大剣全てに火がもった。

「!？」

西寺がワケが分からないといった顔をしている。
伊志井と桂峰も同様のようだった。

大剣はそのまま激しく燃え始め、最後には形も残らず崩れていった。

「あ・る・じ・さ・まあゝ！」

その光景を呆然と眺めていると、急に後ろから誰かが抱きついてきた。

桂峰の使い、朱雀の朱っちゃんだ。

「朱っちゃん、君がやったの？」

「そうですよ、すごいでしょ？褒めてもいいんですよ？」

「そっか、助かったよゝありがとう」

とりあえず頭を撫でてみると、くうゝと目を細めて気持ち良さそうに顔をする。

正直可愛らしい。

「そついえば、あの影の竜はどうしたの？」

「ん？燃やしましたよ」

「・・・そうですか」

笑顔で答えてくるあたり、ちょっと怖い。

「かみにゃん、その人？誰？」

「ええ」と、まあぼくの使いだよ、朱雀のね」

「はあ・・・何かすごいな・・・」

伊志井が物珍しそうに朱雀を見つめる。

朱雀はというと、桂峰の後ろに隠れるように縮こまっている。
どうしたんだろう？

「チッ！この俺を無視してんじゃねえ！」

そんな中、少しの間呆けていた西寺がハッと、怒鳴ってきた。
最近の若者は怒りっぱいなあ」

「絶つてえ殺す！」

影が収束し、今度はトラの形を形成していく。
形ができ、2匹の黒いトラが生まれる。

「「ゴアアウア！！」」

迫力のある鳴き声が耳をうつ。
うわゝ結構怖い。

ちよつと引いたところ、その黒いトラが襲い掛かった来た。

「燃えなさい！」

手をかざし、朱雀はいう。

刹那、2匹のトラが激しく燃え上がり、ボロボロと崩れていった。

「！！、このチート野郎どもがあああ！」

西寺の憎しみのこもった叫びが聞こえた。
それに連動したかのように、西寺の周りにシャボン玉のような球
体の影がいくつも現れる。

その影が風に流されるように不規則な動きで、ゆっくりと迫ってくる。

「そんなモノ、効きません！」

朱雀が手をかざす。

が、直感的にそれはまずいと思った。

影の球体に火がともる。

「ヤバイっ！」

「きゃっ！」

思わず駆け出し、朱雀を押し倒す格好になりながら地面に伏せる。朱雀の短い悲鳴みたいなのが聞こえたが、気にしない。伊志井も何か感じたらしく、伏せている。

瞬間――

ボンっ！ボンっ！ボンっ！ボボボンっ！

影の球体が連鎖するように弾けた。ものすごい衝撃が頭上を襲う。耳がキーーーーーンとする……

ちらりと上を向くと、黒い気体が漂っている。

「かみにゃん、任せろ！」

同じことを考えていたのか、地面に身を伏せたまま伊志井が口を開き、錬金を始める。

パツと伊志井の腕が光、風が吹く。
黒い気体が吹き飛ばされる。

「クソがつ！ドンだけしぶといんだよお前ら」

西寺が苦虫を噛み潰したような顔をする。

「まあまあ、そう怒らないで、ね？」

上半身を起こしながら桂峰がなだめる。
すると・・・

「いやん」

変な声が聞こえた。

下を見ると、朱雀が頬を赤らめ手を当て、身をくねらせている。
器用だな・・・

「ど、どうしたの？」

「いえ、主がこんな積極的だったなんて知りませんでした／＼／」

「・・・さっきの声は何さ？」

「もう、そんなこと私に言わせようとするなんて主ったら意地悪さんなんだからあゝ」

「はぁ・・・？」

ワケが分からない・・・

「あ、でも、その・・・お気持ちは嬉しいんですけど・・・こつも人目があると・・・その・・・心の準備もまだ・・・アレですし・・・」

何か意味の分からないことをつぶやき始める。

「っ！とことんこの俺をバカにしゃがって・・・！」

西寺の額に青い筋が浮かんでいる。
かなりお怒りのご様子でゝ

「ショウ！へるぶつ！」

状況打開の唯一の望み、伊志井に助けを求める。
しかし――

「すまん、俺は何も見えない」

目を伏せ、静かな声でつぶやく。

見捨てられたあああああああ――――――――――

――！！！！！！！！

「死ねえええええ！！」

西寺が影で生成した剣を振りかぶり、切りかかってきた。

「ちよっ！」

すばやく体制を整え、刀を振りぬき、防ぐ。
思い一撃に腕がしびれる、ものすごい力だ・・・

「きゃあゝ主様あゝ！」

未だ地面に寝転んでいる朱雀が黄色い声を上げるが、無視！

「隙あり！」

西寺と闘合つていたところに、伊志井が間に入ってきた。

その手は両方とも淡い光を宿していて、いつでも錬金の出来る状態だった。

伊志井が西寺の鳩尾に、手の平を当てる。

すると、その手を軸に風が渦を巻き、軽々と西寺の身体を吹き飛ばした。

「があっ！」

西寺が地面に身体を打ちつけ、口から血を吐き出した。

今のはかなり効いたみたいだ。

西寺はそのまま動かなくなった、恐らく気絶してるのであろう・

先ほどまでの戦いは何だったのだろうか？と、言いたくなるほどあっさりと終わり、思わず脱力してしまう桂峰と伊志井だった。

第四十九話 無駄のない無駄な動きは結局無駄な動き

戦いの音が消え、静寂が訪れる。

「ねえ、シヨウ」

おもむろに桂峰が口を開く。
静かな荒野にその声はよく響く。

「んあ？何だ？かみにゃん」

「今日1日でかなり疲れた・・・」

「ああ、俺も同感だよ」

ヒュウーと風がふく。

風・・・空気読んだな・・・

「主様、そんな顔しないでください」

朱雀が顔を覗かせて言ってくる。
きつと相当疲れきった顔してるんだろっとなあ

「どうする？取り合えず戻る？」

「そうだな、西寺を拘束して・・・」

桂峰の問いに伊志井が答えた時。

キレイに輝いていた月明かりが突如と消えた。

「！！！？」

3人が同時に空を見上げる。

そこには月のない、真っ黒な空が広がっている。

いや・・・違う・・・

眼を凝らすと何かが空を覆っていた。

空を覆い隠すほどの巨大な何かがそこにいた。

「おいおい、何だありゃ・・・」

驚きの声を伊志井があげる。

まあ無理もないが・・・

「おや、珍しいところで会いましたね」

頭上から声がかかった。

離れているのにハッキリとその声は聞こえた。
この声には覚えがあった。

「帝浦・・・！」

ギリつと歯を食いしばりながら伊志井がいう。
帝浦・・・アイツとは苦い思いばかりだ。

「挨拶は私だけですか、稲葉君が泣きますよ？」

「稲葉もいるのか！？」

伊志井が答えた瞬間。

バサッ！と大きな音がし、激しい風が薙いだ。

その時、一瞬月明かりが差し、空を覆い隠していた正体が見えた。
竜だ・・・

それも超特大な漆黒の竜だった。

「将、桂峰、また会ったな」

おもむろに竜が口を開く。

この竜こそ稲葉 創志朗、その人だった。

「その様子じゃやっぱり西寺君は負けたのですね」

困った、といった感じの帝浦の声が響く。

どうせ微塵もそんなこと思っていないだろうが。

「何しにきた！」

「おっと、そう怒らないでください、今回は戦いに来たんじゃありませんから」

「何？」

疑問を抱いた瞬間。

西寺の身体がふわりと浮いた。

「どうせ負けると思っていたので回収に来ただけです」

パッとその身体が消える。

どうやら回収させられたらしい。

「では私たちはこれで、またいずれ会うことになると思いますが」

ははは、と笑っている。

瞬間、今まで空を覆っていた竜・・・稲葉の姿ともども音もなく消え去っていった。

「待てっ!!」

伊志井の声が荒野に響いた。

―― Said 石宗豪 ―――

だいぶ時間が経ったらしく、太陽が顔を出し始めている。
意気も上がってきて正直疲れた。

それに引き換え叫はまだまだ余裕らしく、いやゝな笑みを浮かべてる。

「あら？兄さんもう終わり？」

「ぬかせ、そんなわけないだろ」

強がってみるが、現状は結構厳しい。
ぶっちゃけピーンチ。

「さてーこれで・・・ん？」

小刀を逆手に持ち、足に力を込めたところで妙な声をあげる。
どうした？

見ると叫の横にふわふわと何かが浮いている。
何あれ？

「叫さん、聞こえますか？」

声が聞こえた。

この声は・・・帝浦か！

「聞こえるわよ、どうしたの？」

「撤収です、戻りますよ」

「ええゝもう？」

「計画は成功です、もはやこの戦いにいる意味はないですから」

「むー、まあいいか、じゃそうということで、またね兄さん」

投げキッスを1つ残して、叫の姿が音もなく消える。

「ちよっ！待てよ叫！」

豪の叫びは空しく響いた。

なんなんだよ！チクシヨーーーー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4419u/>

World of Fantasy After

2011年11月23日18時53分発行